

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ

泉南市文化財調査報告書 第二十三集

1992. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

大阪府の南部に所在いたします泉南市では、ご存じのように関西国際空港の開港を控え、開発が急ピッチで進んでおります。これにともなって埋蔵文化財の発掘調査も年々増化・拡大してきており、今年度は117件の多きを数える届出が提出されました。

このような事態に、文化財を守る立場にいる私たちは、新たな決意をもって望む覚悟でございます。

しかしまた、調査が増加することによって多くの歴史的発見がされ、泉南市の歴史が現代によみがえってきました。このことは、私たち郷土を愛する者たちの夢を膨らませてくれているようです。

今年度からは文化財活用の一環たる、国史跡・海会寺跡の整備もおかげさまで開始することができました。

ご指導、ご協力頂きました皆様に厚く感謝の意を表するとともに、今後なお一層のご協力をお願いする次第でございます。

平成4年3月

泉南市教育委員会

教育長職務代理者

教育次長 道 工 晴 久

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成3年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和を担当者として、平成3年4月1日着手し、平成4年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、田上信一、幸前和裕、松下徹、梶本太昭、愛洲みさ子、阿久根光敏、油野健介、阿波屋昌樹、石川和男、岩橋良典、上野彰子、上野敬子、上野友紀代、鵜川大史、上山剛司、氏田英利、大谷明洋、大西芳、大西和子、大家優昭、尾崎昌樹、小野祐子、格清祐理、梶本孝雄、川野美貴、城戸久恵、久世佐紀子、久保真理、蔵田弘幸、坂本直子、塔田政男、真珠綾、真珠久美、杉浦美枝子、須田恵都子、園田知美、高山智史、武智陽子、建部潤、角岡奈緒美、中澤利香、野中美佐、服部雄二、畠中恵子、巴山忍、日垣愛、日田光治、平野伸一、星川元毅、堀田昌代、榊谷容子、松下隆、松本恵子、南野志郎、宮本佳奈、山本紀子、若狭里美諸氏の協力を得た。  
また、広瀬和雄、芝野圭之助、森屋直樹、土井孝之、鈴木陽一、三好義三、向井俊生諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は岡田・石橋が行なった。執筆の分担は目次に記した。編集は仮屋の指導のもと、岡田がおこなった。
5. 出土遺物の写真撮影については、岡田・石橋があたった。
6. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には個別の番号をつけている。番号の基本構成は「遺跡名称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、天神ノ森遺跡－TN、幡代遺跡－HT、兎田遺跡－US、岡田遺跡－OKD、氏の松遺跡－UJである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお、本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、第6章を除いて遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は基本的に磁北をあらわしている。ただし、挿図第6・9・11・14・15図、および図版PL. 1・2・3・では真北を表示している。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+値(m)である。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットはSD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。
5. 遺物実測図版には区別しやすいよう各種のトーンを利用している。断面は、須恵器－黒塗り、弥生土器・土師器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーンのように塗り分けた。
6. 遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。
7. 第5表とPL. 1・2の番号は一致させた。
8. 遺物の出土量などをあらわすのに用いたコンテナは内容積約27.5ℓのものを、バスケットは内容積約9.6ℓのものである。

# 目 次

第1章 調査の経過	(岡田)	1
第2章 男里遺跡の調査		8
第1節 既往の調査	(岡田)	8
第2節 91-1区の調査	(石橋)	10
第3節 91-2区の調査	(岡田)	11
第4節 91-3区の調査	(岡田)	12
第5節 91-4区の調査	(岡田)	12
第6節 91-5区の調査	(岡田)	14
第7節 91-6区の調査	(岡田)	15
第8節 91-7区の調査	(岡田)	16
第9節 91-8区の調査	(岡田)	17
第10節 91-9区の調査	(石橋)	17
第11節 91-10区の調査	(岡田)	20
第12節 91-11区の調査	(石橋)	21
第13節 91-12区の調査	(石橋)	22
第14節 91-13区の調査	(石橋)	23
第15節 90-8区の調査	(岡田)	28
第16節 90-11区の調査	(岡田)	30
第17節 90-12区の調査	(岡田)	30
第18節 90-13区の調査	(岡田)	32
第3章 天神ノ森遺跡の調査	(岡田)	35
第1節 既往の調査		35
第2節 91-1区の調査		36
第3節 91-2区の調査		37
第4章 幡代遺跡の調査		38
第1節 既往の調査	(岡田)	38
第2節 91-1区の調査	(岡田)	39

第3節	91-2区の調査	(石橋)	39
第4節	91-3区の調査	(石橋)	41
第5節	90-3区の調査	(岡田)	42
第5章	兎田遺跡の調査	(石橋)	44
第1節	既往の調査		44
第2節	91-1区の調査		45
第6章	岡田遺跡・氏の松遺跡の調査		47
第1節	既往の調査	(石橋)	47
第2節	OKD91-1区の調査	(石橋)	48
第3節	OKD91-2区の調査	(岡田)	51
第4節	OKD91-3区の調査	(岡田)	53
第5節	OKD91-4区の調査	(岡田)	54
第6節	OKD90-2区の調査	(岡田)	55
第7節	OKD90-3区の調査	(岡田)	56
第8節	UJ91-1区の調査	(石橋)	58
第7章	まとめ	(岡田)	59

## 挿 図 目 次

第1図	男里遺跡91-1・91-6・91-15区地形図	10
第2図	男里遺跡91-5区地形図	13
第3図	男里遺跡91-9・91-10区地形図	18
第4図	男里遺跡91-9区出土の平瓦	20
第5図	男里遺跡91-13・91-14区調査区位置図	23
第6図	男里遺跡91-13・91-14区地形図	25
第7図	男里遺跡91-8・90-8区地形図	28
第8図	男里遺跡90-11・90-12区地形図	32
第9図	天神ノ森遺跡調査区位置図	35
第10図	天神ノ森遺跡91-1・91-2区地形図	36
第11図	幡代遺跡調査区位置図	38
第12図	幡代遺跡91-2区地形図	40
第13図	幡代遺跡91-3・91-4・90-3区地形図	41
第14図	兎田遺跡調査区位置図	45
第15図	岡田・氏の松遺跡調査区位置図	47
第16図	岡田遺跡91-1区地形図	49
第17図	岡田遺跡91-1区出土の平・丸瓦	51
第18図	岡田遺跡91-2・90-2・90-3区地形図	52
第19図	岡田遺跡90-3区出土の石鏃	57

## 表 目 次

第1表	発掘および試掘届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	5



第4表 立会調査一覧表.....	6
第5表 文化財一覧表.....	63

## 図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡調査区位置図
PL. 4	男里遺跡調査区①
PL. 5	男里遺跡調査区②
PL. 6	男里遺跡調査区③・幡代遺跡調査区
PL. 7	岡田・氏の松・兎田・天神ノ森遺跡調査区
PL. 8	各調査区出土の遺物
PL. 9	男里遺跡91-1区
PL. 10	男里遺跡91-2・3区
PL. 11	男里遺跡91-4・5区
PL. 12	男里遺跡91-6・7区
PL. 13	男里遺跡91-8・9区
PL. 14	男里遺跡91-10区
PL. 15	男里遺跡91-11・12区
PL. 16	男里遺跡91-13区
PL. 17	男里遺跡90-8区
PL. 18	男里遺跡90-12・13区
PL. 19	天神ノ森遺跡91-1・2区
PL. 20	幡代遺跡91-1・2区
PL. 21	幡代遺跡91-3・90-3区
PL. 22	岡田遺跡91-1・2区
PL. 23	岡田遺跡90-2区

- PL. 24 岡田遺跡90-2・3区
- PL. 25 兎田遺跡91-1区・氏の松遺跡91-1区
- PL. 26 男里遺跡91-9区出土の土器
- PL. 27 男里遺跡91-13区出土の土器
- PL. 28 男里遺跡・岡田遺跡出土の遺物
- PL. 29 男里遺跡91-9区・岡田遺跡91-1区出土の瓦

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ

## 第1章 調査の経過

大阪府の南部、泉州地域の中央に泉南市は位置している。西は大阪湾に面し、東は和泉山地でくぎられ市域の南部は和歌山県に接している。市域の北には泉佐野市、南は阪南市が位置し、それぞれ境界は榎井・男里の両河川がほぼあてられよう。

市域の北半には段丘面および沖積平野からなる平地がひろがり、現在の市街は北半部に集中している。遺跡の分布も同様で、基本的に平地とその周辺に集中している。なかでもとりわけ分布密度が高いのは、市域の両側を流れる河川流域である。

市域西縁の男里川流域では近年の調査により更に遺跡数が増加している。これまでは下流域の男里遺跡、中流域の幡代遺跡などが調査数の中心であったが、中・上流域の岡中・岡中西遺跡、あるいは下流域の高田遺跡など近年調査例が増えつつある。また市域東辺の榎井川流域では、最近特に遺跡が新規発見される事が多く、これまで不明な点が多かった市域東部の歴史情報が集積されつつある。例えば、大阪湾に面した低位段丘面に展開する岡田・岡田西・氏の松遺跡などや、中位段丘面に立地する北野・大苗代遺跡など、枚挙にいとまがない。

このように遺跡が新規に発見され増加していく背景に、市域のみならず広く大阪南部の広域に押し寄せる「開発の波」があることは否めない。関西国際空港の開港をまどかに控え、周辺地域では多数の開発が行われている。これが影響してか、直接・間接を問わず近年特に今年度の開発に伴う発掘調査の増加にはすさまじいものがあった。

このような状況のもと、今年度は個人住宅建設等に伴う発掘調査を男里遺跡13件、天神ノ森遺跡2件、幡代遺跡4件、兎田遺跡1件、新家遺跡1件、岡田遺跡2件、氏の松遺跡1件の合計24件おこなった。

これらの調査の結果は、各遺跡ごとに本文で詳しくふれていきたい。

以上の各遺跡における調査区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第2表に示したとおりである。

第1表 平成3年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成4年2月29日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )
3年・3	6	88,498.98	3	4,085.73	9	92,584.71
4	4	33,119.25	3	11,191.057	7	44,310.307
5	10	3,440.97	2	1,361.12	12	4,802.09
6	3	306.38	2	1,445.41	5	1,751.79
7	7	1,348.974	3	3,049.72	10	4,398.694
8	9	16,091.12	4	13,998.60	13	30,089.72
9	8	5,544.75	3	1,537.63	11	7,082.38
10	10	4,155.83	1	549.00	11	4,704.83
11	11	3,203.32	3	2,043.11	14	5,246.43
12	5	4,027.11	2	1,506.646	7	5,533.756
4年・1	6	2,864.84	4	909.08	10	3,773.92
2	5	949.07	3	7,744.77	8	8,693.84
合 計	84	163,550.594	33	49,421.873	117	212,973.467

## 第2表 発掘調査一覧表

平成4年2月29日現在

No	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	91-1区	男里		448.37	住宅新築	3年9月	本書掲載
2	男里遺跡	91-2区	男里		111.21	住宅新築	3年11月	同上
3	男里遺跡	91-3区	男里		270.24	住宅新築	3年6月	同上
4	男里遺跡	91-4区	男里		150.404	住宅新築	3年7月 ～8月	同上
5	男里遺跡	91-5区	男里		125	個人用倉庫 新築	3年12月	同上
6	男里遺跡	91-6区	男里		563.31	住宅新築	3年12月	同上
7	男里遺跡	91-7区	男里		242.95	住宅新築	3年7月	同上
8	男里遺跡	91-8区	男里		316.44	店舗付き 住宅新築	3年7月	同上
9	男里遺跡	91-9区	男里		373.00	住宅新築	3年5月 ～6月	同上
10	男里遺跡	91-10区	男里		606.14	住宅新築	3年4月	同上
11	男里遺跡	91-11区	男里		56.20	事務所	3年5月	同上
12	男里遺跡	91-12区	馬場		238.20	住宅新築	3年8月 ～9月	同上
13	男里遺跡	91-13区	男里		1,585.65	倉庫付 住宅新築	3年10月	同上
14	男里遺跡	91-14区	幡代		325.72	個人用 倉庫新築	4年2月	現在整理中
15	男里遺跡	91-15区	男里		129.17	住宅新築	4年2月	同上
16	男里遺跡	90-8区	男里		172.74	住宅新築	3年1月	本書掲載
17	男里遺跡	90-11区	男里		113.26	住宅新築	3年2月	同上
18	男里遺跡	90-12区	男里		356.60	住宅新築	3年2月	同上
19	男里遺跡	90-13区	男里		54.59	事務所	3年3月	同上
20	天神ノ森遺跡	91-1区	男里		390.39	店舗付 住宅新築	3年12月	同上
21	天神ノ森遺跡	91-2区	男里		235.09	住宅新築	3年12月	同上
22	幡代遺跡	91-1区	幡代		127.46	住宅新築	3年5月	同上
23	幡代遺跡	91-2区	幡代		524.89	住宅新築	3年8月	同上
24	幡代遺跡	91-3区	幡代		193.80	個人用 倉庫新築	3年10月	同上
25	幡代遺跡	91-4区	幡代		678.58	住宅新築	4年2月	現在整理中
26	幡代遺跡	90-3区	幡代		238.01	倉庫新築	2年3月	本書掲載
27	兎田遺跡	91-1区	兎田		319.81	住宅新築	3年10月	同上
28	新家遺跡	91-1区	新家		696.45	住宅新築	4年2月	現在整理中
29	岡田遺跡	91-1区	岡田		649.61	庫裏増築	3年6月	本書掲載
30	岡田遺跡	91-2区	岡田		169.84	農業用倉庫	3年12月	同上
31	岡田遺跡	91-3区	岡田		574.04	倉庫新築	3年12月	同上
32	岡田遺跡	91-4区	岡田		850.30	事務所付 個人住宅	3年4月	同上

No	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月	備 考
33	岡田遺跡	90-2区	岡田		122.32	住宅新築	2年1月	本書掲載
34	岡田遺跡	90-3区	岡田		351.58	住宅新築	3年2月	同上
35	氏の松遺跡	91-1区	岡田		190.61	住宅新築	3年5月	同上
36	北野遺跡	91-1区	信達大苗代		713.97	店舗付 個人住宅	3年7～ 8月	別書掲載
37	北野遺跡	91-2区	信達大苗代		730.57	店舗新築	3年7月	トレンチ3か所設定。遺構・遺物は確認されなかった。
38	大苗代遺跡	91-1区	信達大苗代		1,660.50	共同住宅 新築	3年4月 ～5月	別書掲載
39	大苗代遺跡	91-2区	信達大苗代		297.88	工場新築	3年8月	同上
40	大苗代遺跡	91-3区	信達大苗代		785.36	工場新築	3年6月	トレンチ1か所設定。遺構・遺物は確認されなかった。
41	大苗代遺跡	91-4区	信達大苗代		715.00	共同住宅	4年2月	現在整理中
42	新伝寺遺跡	91-1区	北野		32,382.35	大規模店舗	3年5～ 11月	別書掲載
43	岡田東遺跡	91-1区	北野		764.21	店舗新築	4年2～ 3月	現在整理中
44	岡田西遺跡	91-1区	岡田		11,228.00	道路改修	3年9～ 4年3月	別書掲載
45	戎畑遺跡	91-1区	樽井		2,995.00	共同住宅 新築	3年5月	トレンチ3か所設定。遺構・遺物は確認されなかった。
46	奥の池遺跡	91-1区	幡代		8,465.9	公共施設の 宅地造成	3年6月	遺構・遺物は確認されなかった。

### 第3表 試掘調査一覧表

平成4年2月29日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	信達牧野		365.80	2階建共同住宅	3年5月8日	トレンチ2か所設定。地山は黄色粘土。遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	新家		990.89	木造2片共同住宅・店舗	3年5月9日	トレンチ2か所設定。地山は青灰色粘土。遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井		6,216.257	病院増築	3年5月21日	トレンチ3か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	鳴滝		370.23	木造2階3棟建築	3年5月30日	トレンチ3か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		618.30	自家用倉庫建築	3年6月18日	トレンチ1か所。盛土が著しくほとんど掘削できなかった。黄色の粘土層を確認。遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	樽井		827.11	住宅兼店舗	3年7月11日	トレンチ3か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	鳴滝		368.40	木造一戸建3戸	3年8月6日	トレンチ2か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	樽井		676.59	倉庫増築	3年8月20日	トレンチ1か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	樽井		694.62	倉庫	3年10月14日	トレンチ3か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	樽井		1,065.36	貸倉庫	3年11月1日	トレンチ1か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達牧野		494.11	共同住宅	3年11月18日	トレンチ1か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達牧野		549	府立福祉センター工事	3年11月24～29日	対象地全域に調査区を設定した。過去に大きく変更を受けており、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	北野		764.21	貸店舗	3年1月7～8日	トレンチ2か所設定。弥生から中世までの遺物、ピット、土坑などの遺構を確認。本調査を行なう。新規発見遺跡(岡田東遺跡)
13	範囲外	樽井		4,609.00	共同住宅に伴う基礎掘削	3年1月20日	トレンチ3か所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。

## 第4表立会調査一覧表

平成4年2月29日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積(m <sup>2</sup> )	用途	調査年月日	備考
1	高田山古墳群	幡代		205.27	個人住宅	3年3月1日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	氏の松遺跡	岡田		0.0078	ボーリング調査	3年3月1日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	男里遺跡	男里		50	道路改修	3年3月29日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	新家オドリ山遺跡	新家		157.36	分譲住宅	3年4月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	新家オドリ山遺跡	新家		150	分譲住宅	3年4月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	新家オドリ山遺跡	新家		145.78	分譲住宅	3年4月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	新家古墳群	新家		5.2	ガス管埋設	3年4月17日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	高田山古墳群	幡代		24.84	個人住宅	3年5月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	海会寺跡	信達大苗代		3.3	ガス管埋設	3年5月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	男里遺跡	男里		2.25	ガス管撤去	3年6月26日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男里遺跡	男里		1.65	ガス管埋設	3年7月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	新家オドリ山遺跡	新家		103.29	個人住宅	3年7月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	新家古墳群	新家		3.0	ガス管修繕	3年7月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	滑瀬遺跡	信達六尾		3205.5	道路改修	3年8月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	高田山古墳群	幡代		1.5	ガス管埋設	3年8月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	下村1号墳	新家		135.71	分譲住宅	3年8月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	岡中遺跡	信達岡中		230	水路工	3年9月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
18	北野遺跡	信達大苗代～北野		15.0	ガス管修繕	3年10月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	男里遺跡	男里		5.45	ガス管埋設	3年10月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	新家オドリ山東遺跡	新家		391.03	個人住宅	3年10月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
21	三軒屋遺跡	兎田		2000	河川改修	3年11月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
22	永寿下池	信達牧野		989.9	堤体改修	3年12月7日	遺構・遺物は確認されなかった。



No	遺跡名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
23	牛神池	信達六尾		600	堤体改修	3年12月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
24	中の池	新家		280	同上	3年12月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
25	増田池	岡中		560	同上	4年1月18日	堤体部より極わずかの土師器片を採集した。
26	北野遺跡	信達大苗代		392.51	ガス管埋設	4年2月7日	遺物包含層を確認した。
27	海岩宮池遺跡	信達大苗代		169.84	個人住宅	4年2月12日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2・3）

男里遺跡は市域の北西、男里川右岸に形成された沖積平野に中心を置く、縄文時代から近現代に至る複合遺跡である。

遺跡の範囲は現在のところ、遺跡東限を「長山」丘陵裾で、西限を男里川で区切られ、南は幡代遺跡と接する付近に求められている。その規模は南北1.5km、東西1.2kmにもおよび、現在の行政区画による男里・馬場の二つの集落をほぼ範囲に納めるほどで、市域随一の規模を誇る。その規模ゆえにか、立地条件も沖積段丘・自然堤防・旧河道・洪積段丘など変化に富む。現段階では旧地形を復原するにはいたっていないものの、将来発掘調査のデータ蓄積がすすめばこれも可能ではないかと思われる。

それでは、以下に時代別に述べてゆこう。

現在までに確認されたもっとも古い遺構は、遺跡の北端部で検出された縄文時代後期の所産となる溝である。ここからはコンテナ数箱分の縄文土器が出土している。

縄文時代の遺物は市域ではこのほか、フキアゲ山東遺跡で前期に属するものが出土しているほか、海会寺跡・岡田西遺跡などでも出土例が確認されているがその大半が後・晩期に属するもので、当地における縄文時代後期以降の集落数の増加傾向をあらわしているといえるだろう。ただし、男里遺跡では広大な遺跡の最北端で一遺構が確認されているに過ぎず、これからの調査例の増加を待ちたい。

弥生時代における遺構の分布は先の縄文時代のものとは大きな異なりを見せる。男里遺跡のひとつの表徴ともいべき弥生時代の往時の集落範囲は、先の縄文時代のそれとは異なり、遺跡の中央および南半に広く分布している。特に現在の遺跡中央に位置する双子池の周辺に顕著に認められる。ここではこれまで、中期に属する竪穴住居1棟、近接地からは数基の木棺墓を含む遺構群が確認されており、集落と接して墓域が存在することが明らかになっている。

この他、双子池の東縁では、現在の堤体の下層から、庄内期の溝が検出されている。今後の調査の増加を期待したい。

古墳時代では、基本的に弥生時代遺構分布から発達したかのように、遺跡の南・中央付近からやや西および北側にその範囲を拡大する。ちょうど現在の雄信小学校周辺で遺物出土が顕著に認められる。

また、これらの一群とは一線を画すように、遺跡の北半にも遺構分布が認められる。現在の府道堺阪南線の北側で過去に古墳時代の小石室が発掘されていること、および男里川の自然堤防上に位置する地点（本書のON90-13区付近）で6世紀の遺物群がまとまって出土したことである。特に後者は、遺跡内でも古代以降に開発が行われたと考えられていた部分にあたり、この地が古墳時代から何等かの形で利用されていたことが改めて明らかにされた。

古代の遺構分布は、古墳時代のものとさほど変化は無く、遺跡の中央から広く北半にまで広がりを見せている。あえて述べるなら、やはり遺跡中央の双子池周辺で顕著に認められるといえようか。近年この付近での調査例が少なく、データの蓄積はさほど進んでいない状況である。

中世以降では、遺物・遺構とも遺跡のほぼ全域で確認される。現在の集落に目を向けると、男里・幡代ともに中世以降の「集村」の形態を強く留めるものであることは一目瞭然である。いまのところ現集落近辺での調査例が圧倒的多数を占めるが、やはり中世に属する遺構・遺物が確認されることが多い。現在の形の集落形成がはじまる時期を知るために必要な貴重なデータが蓄積されてきている段階といえる。

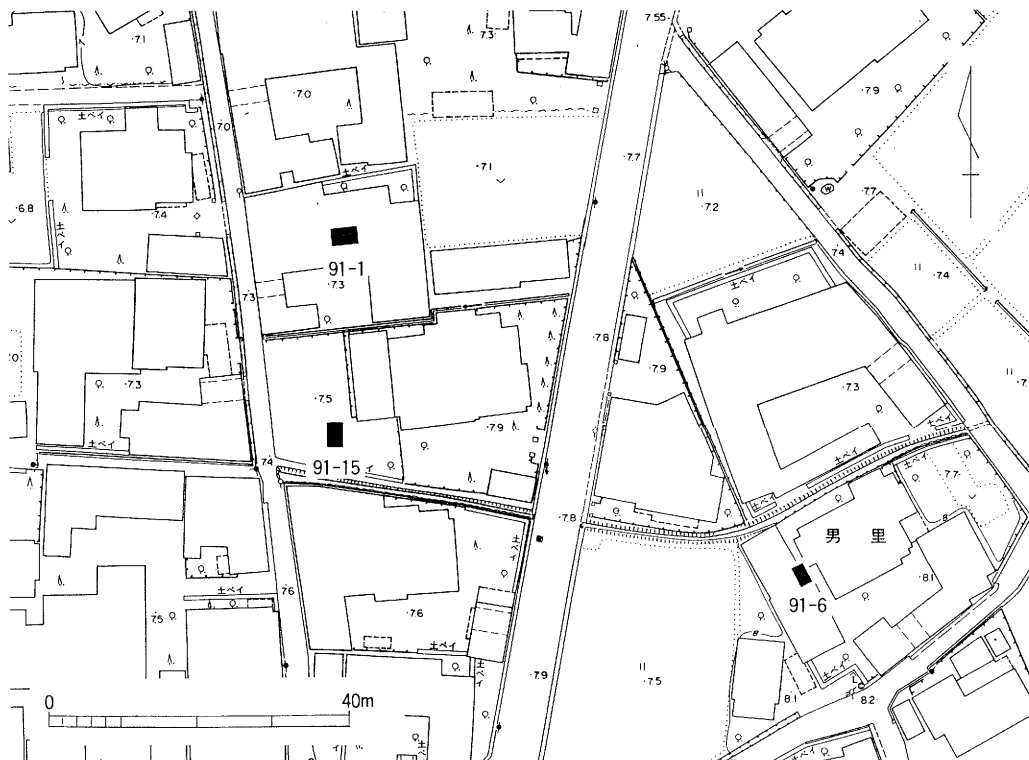
以上、各時代ごとの遺構分布状況を述べてきた。大まかに全体の流れを述べると、縄文時代遺構が遺跡の北端に突然出現することを除けば、基本的に遺跡の南半から弥生時代集落が始まる。そして、時代をくだるごとに徐々に遺跡中央から北半へと展開していき、中世のある時期から現在の集落の形に固定されていく、といった状況である。

総じてまだデータの蓄積が必要であることはいうまでもなく、今後の調査例の増加によって得られる新たな知見から、遺構分布の流れがより詳細に判明していくことを期待する。

## 第2節 91-1区の調査

### 1. 位置 (P.L. 1、第1図)

調査区は、現在の男里集落のほぼ中心に位置し、男里川右岸の自然堤防上に立地するものと思われる。約1.5m×約3mのトレンチを1カ所設定した。



第1図 男里遺跡91-1・91-6・91-15区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・9)

遺構面は2面確認された。層序は、大別して盛土(約20cm)、数層の旧耕土層(約40cm)、旧床土層(約10cm)、暗灰褐色シルト層(約10cm)、地山と考えられる暗褐色シルト層の5層に分類できる。このうち暗灰褐色シルト層の上面では円形の土坑と、その下層の暗褐色シルト層の上面からは溝が検出された。

遺物は旧耕土層より土師器、須恵器などが出土しているがいずれも細片で図化できるものはない。

### 3. 遺構（P L. 4）

上層遺構のS X01は、直径約60cm、深さ約10cmの規模をもち、ほぼ円形を呈する。埋土は淡黄灰色砂質シルトである。

下層遺構のS D02は、幅約60cmで、トレンチのほぼ中央、東北東から西南西の方向に検出された。断面は緩やかな凹面形を呈し、埋土は暗褐色シルトである。いずれの遺構とも遺物は出土しなかった。

## 第3節 91-2区の調査

### 1. 位置（P L. 3）

調査区は遺跡の北西部にあたり、地形分類上は自然堤防上に立地している。ここに接して古くは「宝蓮寺」と呼ばれる寺院が存在したといわれ、周辺の調査では土坑墓などの中世遺構の存在が確認されている。これらの調査例から周辺の層序を追っておくと、当調査区の道路を挟んで南側10m付近では、礫混じり黄灰色土が遺構面となっているのに対し、西側10m付近では軟弱な礫層上に遺構が構築されていた。このように、近接した調査例でも大きく層序が異なることが知られていた地点である。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・10）

今回の調査区では、第1層に当たる盛土の直下より順に暗黄灰色土層、暗黄褐色土層、暗灰色礫層、暗黄灰色砂層、暗灰褐色礫層が堆積している。第2層に当たる暗黄茶色土層は自然堆積したものではなく人為的に盛土されたものと思われる。第3・4層は自然堆積したものと思われるが、各層の上面は安定したものではない。第5層以下が地山ととらえられるが、やはり非常に軟弱で安定したものではない。各層の上面では遺構は確認できなかった。

先に述べた周辺の調査例と比較した場合、やはり西接する調査区と近似しており、南側のものとはまったく異なっている。当調査区の南側を東西に走る道路付近を境に、層序が異なるのかもしれない。

遺物は第3・4層からわずかに出土したのみである。第3層からは軟質の瓦

片が、第4層からは同じく軟質の蛸壺片が出土するが、どちらも中世以降の所産となるものと思われるが、ローリングをうけた小片ばかりで、各土層の堆積時期を判断する材料には至らなかった。

#### 第4節 91-3区の調査

##### 1. 位置 (P L. 3)

91-3区は男里遺跡の北西端付近に位置しており、現在の男里集落の西縁、男里川にほぼ面する場所にあたる。地形分類の観点から見ると、自然堤防上に立地していることになる。当地の周辺では発掘調査例は少なく、やや比較の材料に欠けるものである。

##### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・10)

ここでの層序は盛土層の直下から順に、耕土である暗灰色土層、暗黄灰色砂質土層、暗黄色砂質土層と続く。第4層にあたる暗黄色砂質土層には直径5mm以下の礫が混じっている。第5層である暗灰褐色含礫土層の下層には、暗灰褐色土層、暗灰褐色砂層が認められ、これより下層は灰褐色や暗黄灰色の粘土層に変化する。この粘土層も、上層にあたる各礫層と同じく、固く締まったものではなく非常に軟弱なもので、男里川の営力によって形成された自然堤防の構成層の一部と考えられる。遺構の存在は確認できなかった。

ここでは、第3層から土師器の細片が出土しているが、摩滅が激しく観察に耐えるものではなかった。

#### 第5節 91-4区の調査

##### 1. 位置 (P L. 3)

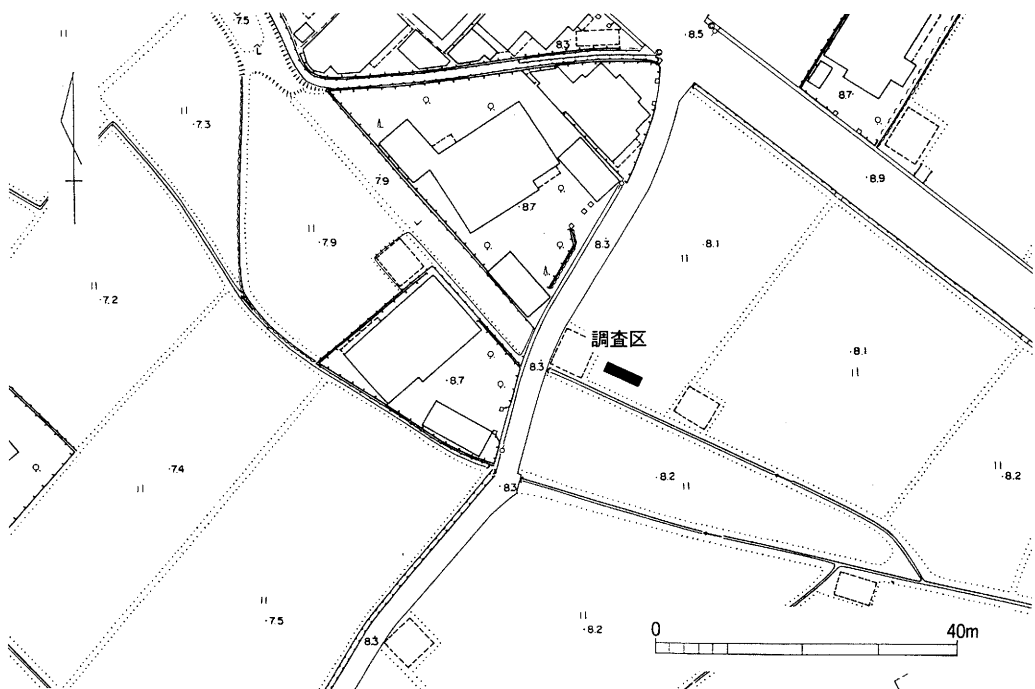
91-4区は遺跡の最北端部に位置している。地形分類上は男里川の氾濫原上に立地していることになり、当地のやや東側に旧男里川河道の存在が推定されている。調査区の西側には、男里集落を南北に縦断する市道が走っている。当

地は男里遺跡の縄文時代遺構検出地点よりもさらに北側にあたり、過去の調査例も比較的少ない。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・11)

確認することができた層序は、上から順に盛土層、暗灰色土層、淡黄灰色土層、黄色混じり暗茶灰色土層、黄灰色砂層である。第2層である暗灰色土層は耕作土であり、第3層はいわゆる床土にあたる。近年まで当地が耕作地であったことがうかがえる。この下層の第4層は層厚約60cmを測り、色調は均一ではなく黄色粘土をブロック状に含んでいる。当調査区の出土遺物はすべて第4層からのものである。土質・色調の上では上下2層には分層できなかったが、出土の状況はおおむね第4層の上半からであった。

当調査区ではいわゆる地山に達することはできなかった。また、遺構も確認することはできなかった。



第2図 男里遺跡91-5区地形図

### 3. 遺物

出土遺物の大半は極細片であり、図化する事はできなかったが、弥生時代から古代・中世に至るまでの遺物が出土している。

弥生土器は2片出土しているが、どちらもローリングを受けており往時の姿を推定することも難しいが、1点は壺、もう1点は甕の頸部のようなものである。どちらも時期は不明。

古代の所産となる遺物では須恵器が認められる。これも弥生土器とおなじく状態は悪い。長頸壺の頸部と考えられるが、あるいはもっとさかのぼり、古墳時代の高杯・脚部であるかもしれない。

中世遺物としては、瓦器・碗底部片、土師器・甕口縁部片・皿小片、蛸壺片があげられる。どれも摩滅が激しく観察に耐えるものは無い。

## 第6節 91-5区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第2図)

調査区は、現男里集落からやや東に外れた位置にあたる。地形的には遺跡の中央に位置する双子池の北西側に位置している。地形分類上は、氾濫原あるいは旧河道推定地の左岸縁付近に立地している。過去の調査例では、北側20m付近の地点で、瓦器片を包含する礫層の存在が確認されている。また、南東約70mの地点からは、堆積層が推定旧河道の方向に向かって傾斜する事がわかっている。このほか、当地の北西には縄文時代遺構が検出された調査地があり、ここまでの距離は約30mと非常に近接している。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・11)

基本的な層序は、水田の床土である黄茶褐色土層を取り除けばすぐに砂礫の互層が露呈する。この砂礫層は暗黄灰色系の砂層と、直径5mm大の円礫層(それぞれ層厚5cm以下)が10層以上重なって構成されている。この互層は全体に北にむかって傾斜しており、傾斜の角度と切り合いとの関係から少なくとも2グループ以上に分層することができる。



この互層の下層には、暗灰色粗砂層、灰色粘土混じり礫層、暗黄色粘土混じり円礫層が認められる。これらはほぼ水平堆積しており、上層の互層とは印象を異にする。粘土層の下部付近からは激しい湧水をとめない、今回調査できなかった部位より下層に滞水層があること、および現在も水脈が存在していることが確認できた。

互層はもとより水平堆積を見せる各層の上面でも遺構は確認できなかった。また、遺物は互層内から軟質の土器片が出土しているが、残念ながらローリングを受け、観察に耐えるものではなかった。ただ、胎土を見る限り、弥生土器の可能性も捨てきれないものである。

## 第7節 91-6区の調査

### 1. 位置（P.L. 3、第1図）

91-6区は遺跡の北西部、現在の男里集落の東端付近に位置している。地形分類上は、氾濫原上に立地していることとなる。今年度調査区と比べれば、91-1区と91-7区の間あたりの地点となる。最近の調査では当地の南側で、中世の所産とおぼしきピットが確認されている。

調査区の南側には北東から南西に走る旧道がある。当調査区がこの旧道に面するところに祠がまつられており、古く近世から現在に残る道であることが知られる。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 4・12）

調査は既存建物にともなう盛土（層厚約40cm）と、それ以前の近世建物の構築時の整地土（同じく約40cm）と考えられる暗茶灰色土を取り除いてから行われた。この下層には、旧耕土と思しき暗灰褐色土、淡青灰色土、淡黄青灰色土そして黄色混じりの青灰色系シルト、青灰色系シルトと続いていく。ちょうど標高約9m付近から下部は水脈があつてか、特に青灰色が強くなる。また、調査トレンチより西側で掘削を行った部分では、ほぼ同様の層序が認められた。ただしここではより深い部分を観察することができ、標高約6m付近でシルト

層が青灰色砂層に変化していくことが知られた。これらのシルト・砂層は、恐らく氾濫原の一部、バックマーシュの構成層と考えられる。

遺物はまったく出土せず、遺構も確認できなかった。

## 第8節 91-7区の調査

### 1. 位置 (P L. 3)

調査区は先の91-6区の南方約50m、やはり男里集落の東端に位置している。立地は地形分類上、氾濫原に区分される。現地形での地表の標高は約8.3mを測る。当地周辺での発掘調査例はとぼしく、比較検討するためには今後の調査例の増加を待ちたい。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・12)

層序は上層から盛土層、暗灰色砂礫土層、暗黄灰色粘土層、暗青灰色シルト層、こぶし大の円礫を含む暗灰色シルト層と続いていく。第3層にあたる暗黄灰色粘土層および第2層は近世の整地層と考えられ、ここより近世の所産となる土器・瓦が出土した。

### 3. 遺物 (P L. 8)

出土遺物は、大半が近世の平瓦であるが、一部土師器、磁器片が含まれる。その出土量にもかかわらず、図化に耐えうるものは炮烙1点のみだった。

炮烙(38)はよく使用されているが、残存の状態は非常によい。わずかに内湾しながら立ちあがる口縁部は、端部をやや肥厚させながら丸く納める。底部との境界は明瞭な稜線が設けられる。底部は中央向かって非常に薄く仕上げられるため欠損しており、その全貌は把握できない。外面にはススが付着しており底部内面にはコゲつきのせいか、色調が変化している。胎土は比較的精緻だが、長石粒や黒雲母粒を非常に多く含んでいる。全体に淡灰橙色を呈す製品。口径は32.8cmを測る。

## 第9節 91-8区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第7図)

現在、遺跡の北部を北東から南西に向かって府道堺阪南線が横断している。91-8区は遺跡の中央に位置し、府道に南接する。双子池の下池の東側にあたり、地形分類的には氾濫原上に立地している。過去の調査で発見された古墳時代小石室は、ちょうど当調査区から府道を挟んだ北側の地点に位置していた。両者の距離は約30m程しか隔たっていない。また最近の調査では当地の北東約30m付近では古代遺物の包含層が確認されている。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・13)

調査区内は全体に既存建物の基礎により大きくカクランを受けていた。が、一部には盛土以下に良好な状態で保存されていた。層序は上から盛土層、暗灰色土層、黄橙色粘土層、淡灰色砂質土層、灰色砂質土層と続いている。これらは第2層の暗灰色土層が耕土層、第4・5層が旧耕土層と考えられる。これらの内、調査区の北端で一部火熱により赤変している部分が認められる。これらの旧耕土層群の下層がすぐに地山である暗黄褐色粘土層、黄褐色粘土層へ至る。一部カクランの下部ではしみ込み様の暗茶褐色土が介在して地山に至る。

遺物はまったく出土せず、遺構も確認できなかった。

## 第10節 91-9区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第3図)

調査区は現在の男里集落の南東部分にあたり府道堺阪南線「男里」交差点より南東へ約50mに位置し、男里川右岸の自然堤防上ないしは氾濫原に立地するものと思われる。

トレンチは、約2m×約3m (1トレンチ)、約2.5m×約2m (2トレンチ)の2カ所を設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・13)

現代の盛土を除去すると、1 トレンチでは1 m～50cm、2 トレンチでは約30 cmの整地層がみられる。

土質は、基本的にシルト質であるが礫や小石、砂を多く含んでいる。一部には、粘土をブロック状に含んでいるものもあり、プライマリーな状態の土層ではないことがわかる。これらは版築などの工法はみられないものの、明らかに人為的な盛土であり数回にわたって施されているのがみとめられる。時期的には、近世と考えられる。これらを掘削すると、河川性の堆積と思われる砂礫層が検出される。砂礫層の上面は男里川に向かって低くなっており、整地は旧地形を水平にするために行われているようである。さらに砂礫層を掘り抜いたが、遺構、遺物は検出されなかった。

遺物は、1 トレンチの整地層より、中世から近世にかけての遺物が数多く出土している。しかもこれらは、原位置を保っていないとはいえ、かなり遺存状態が良くほとんどローリングなどを受けていないようである。多分、かなり近接した同じ男里遺跡内の遺物であろう。



第3図 男里遺跡91-9・91-10区地形図

### 3. 遺構

1、2 トレンチとも遺構は検出されなかった。

### 4. 遺物 (P L. 8・26・29、第4図)

遺物は、整地層であるにもかかわらず、比較的良好な状態で出土している。なお、遺物の上限は鎌倉時代までである。これらのうち、中世のものだけを図示した。

1～4は土師器の皿である。1～3は小皿である。1は、口縁部がやや外反するものである。2は、褐色を呈し、胎土に雲母を含むのが特徴である。

4はやや大型の部類に入る。外面底部は指頭圧痕が顕著である。

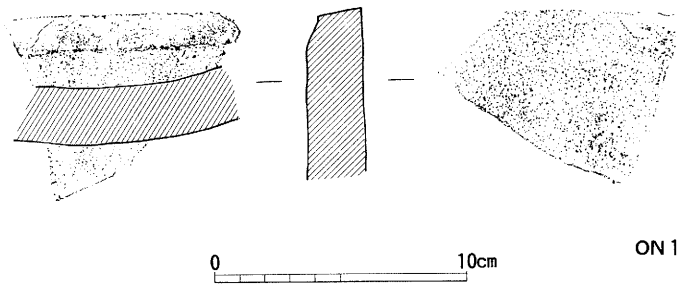
5～7・9は瓦器皿である。比較的小型のもの(5)ともっとも標準的なもの(6・7・9)である。いずれも口縁部にはヨコナデを施し、底部は指頭圧痕によって仕上げている。

8・11～12は瓦器碗である。口縁部に向かってしっかりと立ち上がる古手のもの(10・11)から、暗文が省略され、器高が低くなり、高台の退化した新しいもの(8・12)まで出土している。

13は瓦質の摺り鉢である。外面は比較的遺存状態がよく、全面にハケ目調整を行った後、下方半分ほどに底部から口縁部に向かってヘラケズリを施している。口縁部は、折り返して形造った痕跡が見られ、その後に強いヨコナデを施している。底部は、完全に摩滅している。内面は、擦り卸しによる使用痕とみられる剝離が顕著である。特に体部の下方半分は、卸目も完全に無くなっている。口縁部はヨコナデの後ハケ目を施している。胎土は密で、径2mm程度までの石英など砂粒を少量含んでいる。

14は、真蛸壺である。小片のため口径復元は不可能であった。全体を指頭圧痕によって仕上げ、調整は粗い。紐掛部と思われる肩部にはヨコナデを施している。胎土は粗く、径5mmまでの礫を多く含んでいる。

第4図は、平瓦である。やや厚手で、凹凸両面に離れ砂が顕著に見られる。端縁部は、鋭く面取りが行なわれている。焼成は良好で、灰色を呈し、硬質である。胎土は密で、砂粒はほとんど含まない。



第4図 男里遺跡91-9区出土の平瓦

### 第11節 91-10区の調査

#### 1. 位置 (P L. 3、第3図)

調査区は現在の男里集落の南西端に位置している。双子池はその名からも判るように、上池・下池の2池が南北接するように並んでいる。その間に東西走る生活道路があり、当調査区はその道路に面している。当地の東約50mの地点では古代・中世の掘立柱建物が検出されており、遺跡内でも当該時期の遺構分布密度が高い区域にあたる。

地形分類的には、氾濫原上に立地していることになる。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・14)

調査トレンチを東西2カ所に設定した。東側のものを第1トレンチ、西側のものを第2トレンチと呼ぶこととする。

第1トレンチでは盛土層、耕土である暗灰色土層、床土にあたる橙褐色土層、旧耕土と思われる淡橙灰色土層、第5層にあたる淡灰褐色土層、そして旧床土の橙色粘土層へと至る。この直下がすぐに地山であるマンガン混じり淡黄灰色粘土層となる。

一方、第2トレンチでの基本的な層序は、上から順に盛土層、耕土である灰色土層、耕土の下層にあたる灰黄色土層、床土層である明黄褐色粘土層が確認できる。これより下層は旧耕土・床土層にあたる。第5層の暗黄褐色シルト層

が旧耕土であり、順に明黄褐色シルト層が続き、第7層にあたる橙色シルトがもっとも古い旧床土層と認められる。現代の耕土を含めれば最低3層以上の耕土層が確認できる。第8層はマンガン混じり灰褐色シルト以下、黄橙色シルト、地山である黄褐色シルトに至る。ここでは他に、旧耕土層を覆うように整地が施されていた。

遺構は第1トレンチで2面確認されている。上層遺構面が第5層上面、下層が地山上面でそれぞれ検出された。

両トレンチともに旧耕土・床土層は確認できたものの遺物はほとんど出土せず、良好な包含層は確認できなかった。唯一出土した遺物は第1トレンチ上層遺構から、土師器の細片が出土したのみである。しかしこれも摩滅が激しく観察に耐えうるものではないうえ、遺構の時期を語ることもできなかった。

### 3. 遺構 (P L. 5・14)

第1トレンチでは2面の遺構面が確認できた。以下、下層から順に説明していきたい。

下層遺構は溝が1条、地山上面で検出された。東西方向にほぼ直線的にのびる溝である。非常に浅いもので、断面の形状もレンズ状を呈している。底部のレベルはごくわずかに東へ向かって数センチ下がる程度である。埋土は黄色粘土がブロック状に混じる暗灰褐色粘土で流水していた痕跡はない。遺物は出土しなかった。中心線の方法はE 8° S、規模は長さ2 m以上、幅40 cm、深さ5 cmを測る。

上層遺構は、南北方向に長軸を持つ非常浅い落ちこみ、あるいは溝である。埋土は灰褐色土、幅・深さともばらつきがあり、一定しない。すべて耕作に伴って刻まれた鋤溝であろう。

## 第12節 91-11区の調査

### 1. 位置 (P L. 3)

調査区は男里遺跡の西辺に位置し、市立雄信小学校の西方約50mである。男

里川右岸の自然堤防上に立地すると考えられる。

トレンチは、約1.3m×約2 mのものを1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・15)

現代の真砂土の盛土及び旧建物の盛土が約90cmを測る。その下層の黒褐色の旧滋味土、黄褐色の床土を除去すると河川性の堆積と思われる砂礫層が検出された。

遺構は検出されなかった。また、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

## 第13節 91-12区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3)

調査区は、双子池の東約400mで遺跡の南東端、現在の馬場の集落の南のいずれの水田の中に位置する。地形的には男里側右岸の沖積段丘面上に立地するものと思われる。

トレンチは約2 m四方のものを2カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・15)

2トレンチともほぼ同じ層位を呈している。

大別して4層に分けることができる。第1層は、現代の盛土及び滋味土、その床土で約20~30cmを測る。これらを除去すると、第2層の約10cmの黄灰褐色の砂質シルトの旧耕土層が確認された。第3層は、粘性の強い褐色シルト層で約20cmを測る。この下層から地山と考えられる暗褐色礫混シルト層が確認された。

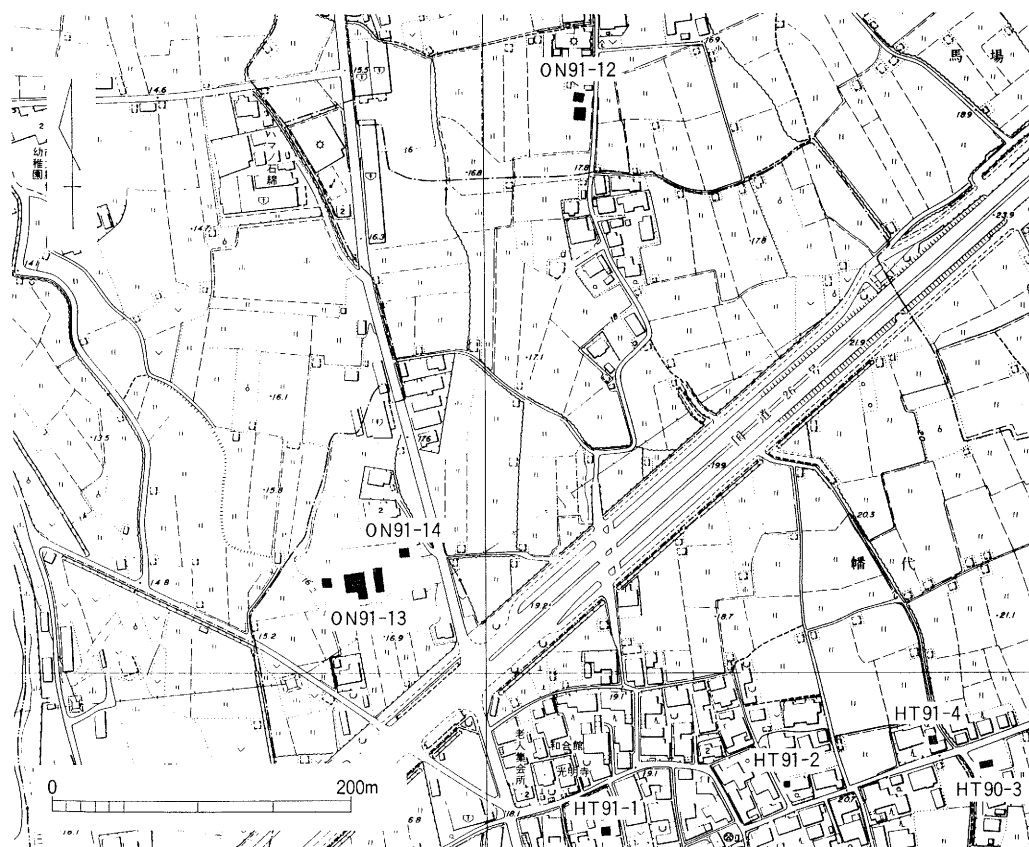
この層の上面で遺構検出を行なったが、遺構は検出されなかった。また、遺物は褐色シルト層より土師質の極小片が出土しているが、図化できるものはなかった。



## 第14節 91-13区の調査

### 1. 位置 (第5・6図)

調査区は男里遺跡の南端部分で、男里遺跡と幡代遺跡を画する国道26号線より北へ約50mの地点である。調査区の西側には、男里川に向かって現地形で、約1mの落ち込みを追うことができることから沖積段丘の先端部分であると推定できる。



第5図 男里遺跡91-13・91-14区調査区位置図

トレンチは約7m×約2m(1トレンチ)、約6m×約7mのL字形(2トレンチ、約2.5m×約1.5m(3トレンチ)の3カ所を設定した。このうち2トレンチより遺構・遺物を検出した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・16)

3つのトレンチとも遺構面までの層序はほぼ同じである。

1 トレンチでは、約80cmの盛土及び現代の滋味土を除去すると、約30cmの灰色及び褐色系砂質シルトの旧耕土と、ベースの床土になると思われる約10cmほどの黄色シルトが確認された。この層の下からは遺構面である安定したにぶい黄褐色シルト層が検出される。

2 トレンチでも約1mの盛土及び現代の滋味土、約10cmの浅黄色シルト(旧耕土)、約10cmの明黄褐色シルト(ベースの床土)、黄褐色シルト(遺構面)という層序を呈する。遺構はすべて明黄褐色シルト層の下層より切り込んでいる。

3 トレンチでは、約1.3mの盛土及び現代の滋味土、約2cmの現代の床土の下層には旧耕土はみられず、約16cmの黄色シルトのベースの床土が堆積している。また遺構面の黄褐色シルト層の上層には、約8cmの暗灰褐色の粘性の強いシルトがみられることが他の2つのトレンチと異なっている。

いずれのトレンチとも、包含層である旧耕土やベースの床土層から、微量の土師器などが出土しているがいずれも細片で図化できるものはなかった。

## 3. 遺構 (P L. 6・16)

遺構を検出したのは2トレンチだけである。以下、説明を加えたい。

S X01は、埋積谷と考えられる。L字トレンチの北側半分で検出され、北西方向へ落ち込んでいる。斜面部は初め緩やかに落ちながら、約1/3のところでやや急に落ち込んで、底と思われる平坦な部分に達している。北西側の上りの部分は検出できなかった。最深部では遺構上面から約1.1mを測り、T.P.は16.5m前後である。

埋土は大別すると3層に分けることができる。上層にあたる6層は、暗褐色シルトで約30cmをはかる。土質は良く締まって固い。遺物は、弥生土器から古墳時代の土師器、須恵器などかなり幅広くみられる。6層の上面には、厚さ約10cmのにぶい黄褐色の砂質シルト層(5層)が部分的にみられる。この土が6層の上面の乾痕と思われるひび割れから侵入しているのが看取され、一時期、この層の上面は、地表に露出していたと言えるであろう。

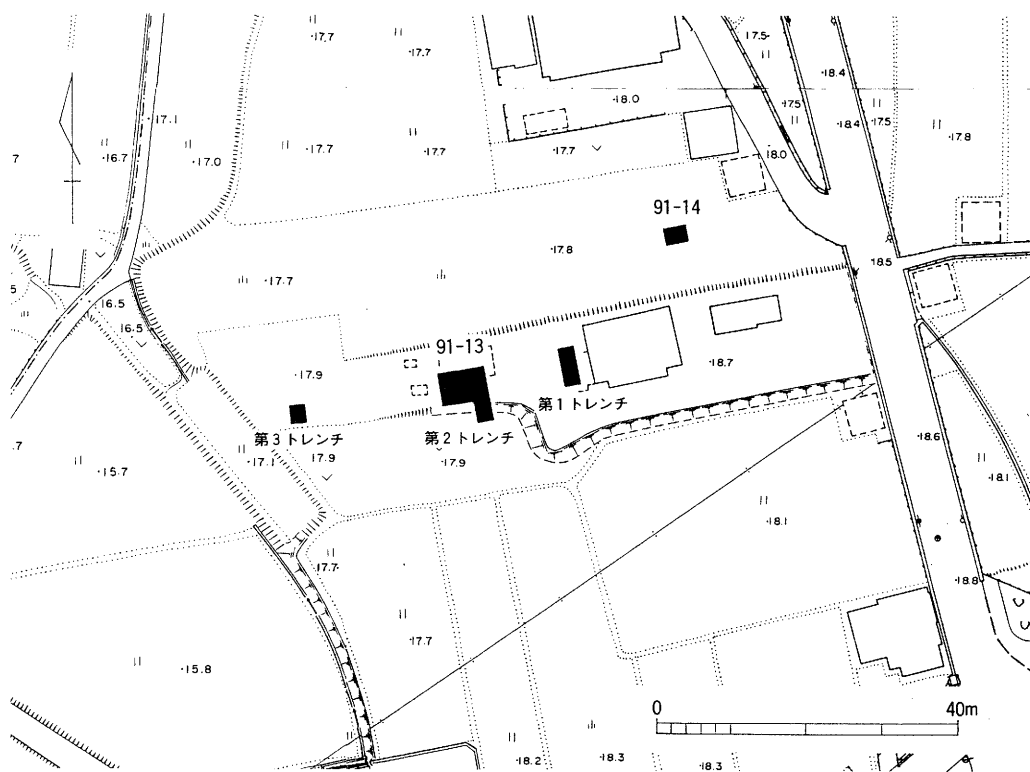
7層は、同様に黒褐色を呈するかなり締まったシルト層である。厚さは、約40cmを測り、微細な土器片や焼土を数多く含んでいるのが特徴である。それらは古墳時代前期の土師器や弥生土器である。

8層は最下層である。褐色シルト層で、約25cmを測る。最も締まりが良く、遺構面の9層とほとんど同じ土質である。遺物は弥生土器のみで、大半が後期であるが一部、中期のものも含まれている。

これらの土層からS X01の埋積の状況をまとめてみたい。

弥生時代の中期末から後期にかけてはこの谷は完全に開析していたと考えられる。その後、土質から判断してかなりの時間をかけて徐々に埋まっていったとみてよい。そして、6層の上層から出土している須恵器の杯(27)からみて6c末から7c初頭までにはほとんど埋まっていたと考えられる。

また、この谷の方向は、沖積段丘の落ち込みの方向とは一致しておらず、現在の地形はこれ以降に形造られたものといえる。



第6図 男里遺跡91-13・91-14区地形図

この他の遺構としては、トレンチの南側で、ピット、土坑などが検出されている。いずれも埋土は褐色及び褐灰色系で砂質シルトである。特に、Pit 4は断面に柱痕とみられる層が確認されており、柱穴であろうと思われる。

その他の土坑も、柱穴になる可能性があるが、いずれもやや不整形を呈しており断定しかねるものばかりである。そのため、調査区内では建物跡を見出すことは出来なかった。

遺物は、Pit 4より土師器の高台部分(28)が1点出土している。

#### 4. 遺物 (P L. 8・27)

出土した遺物のほとんどはS X01からである。量的には、バスケットに1杯ほど出土している。ほとんどは細片で器種はおろか時代の判別もできないほど摩滅しているものが多いが、層位にかかわらず弥生土器が大半を占めているようである。

15～22は底部である。15～21は、S X01最下層、22は下層から出土している。

15は、上方へ向かって大きく開く体部で、ほぼ球形になると思われる。外面は明赤褐色を呈し、黒斑を有している。底部と体部の最下部には指頭圧痕を施した後、ナデで仕上げている。内面は赤褐色を呈している。調整は摩滅のため不明である。胎土はやや粗い。白色砂粒およびクサリレキを少量含む。

16は、底部からやや丸みを帯びて立ち上がる体部を持つ。外面は明赤褐色を呈し黒斑を有する。底部のほぼ中心で小さな隆起をみせる。調整はナデを施していると思われるが摩滅が著しい。内面は橙色を呈し、底部には指頭圧痕、体部には下方から上方に向かってのユビナデを施している。胎土はやや粗く白色砂粒とクサリレキを少量含む。17もほぼ同じ形態を示す。

18は、底部から急激に立ち上がる体部を持つ。外面は黒褐色を呈し、体部の最下部には指頭圧痕を施したのちハケ目調整を行っている。底部は丁寧なナデを施す。内面は黒色を呈し底部は圧痕を施している。胎土は密で、遺存状態はよい。白色粒を少量含んでいる。

19、20は、がっちりとした体部で内外面とも褐色を呈している。外面にはかなり強い指頭圧痕を施している。内面は丁寧なナデである。胎土は密で、遺存

状態はよい。黒色粒を少量含んでいる。

21は、ミニチュア土器と思われるが、いかなるものかは分からない。体部は上方へ向かって大きく開く。内外面とも橙色を呈し、外面の体部最下部には圧痕を施す。胎土は密で、砂粒はほとんど含まない。

22は、底部に焼成前の穿孔を行っており、孔径は1.3cm程である。内外面とも明褐色を呈する。底部には木葉文を有し、内面は板ナデを行っている。穿孔は外側から内側へ向かって行われているようである。胎土は密でクサリレキを少量、径2mmまでの白色粒を多量に含んでいる。

23は、鉢型土器と思われる。口縁部には1条の凹線文を施している。内外とも橙色を呈し、摩滅が著しい。胎土はやや粗く、石英、白色粒、クサリレキなど少量含む。

24～26は高杯の脚部である。すべてS X01下層から出土している。

24は、中空の脚柱部で、杯部へ向かって広がっている。脚裾部に向かっては、まっすぐに落ちずにやや開き気味である。円板充填法と考えられるが円板は欠損している。外面はヘラミガキを施すが、摩滅が著しい。色調は、内外面ともに明褐色を呈す。胎土はやや粗く、2mmまでの砂粒、クサリレキを多量に含む。中期に属するものであろう。

25は、中空の脚柱部で、脚裾部に向って陵を持って大きく外反するが、ほとんど欠損している。全体に摩滅が著しいが、脚柱内部にわずかに絞り目が見られる。内外面とも明赤褐色で、胎土は密。径3mmまでの石英など砂粒を多量に含む。

26は、上半分は中実の脚柱部で、杯部の脚柱部に差し込む形のものである。内面にわずかに絞り目が見られる。内外面とも明赤褐色を呈する。胎土はやや粗く、径2～3mmの砂粒を多量に含む。調整が不明であるが、古墳時代に属するものと思われる。

27は、須恵器の杯である。S X01の上層から出土している。立ち上がりは、「く」の字を描いてやや内傾し、端部はかなり尖っている。受部端よりわずかに上方に出ている程度で、立ち上がりの退化の最終段階といえるであろう。内外面とも灰色を呈し、灰及び自然釉を全面にかぶっている。胎土は密で、白色

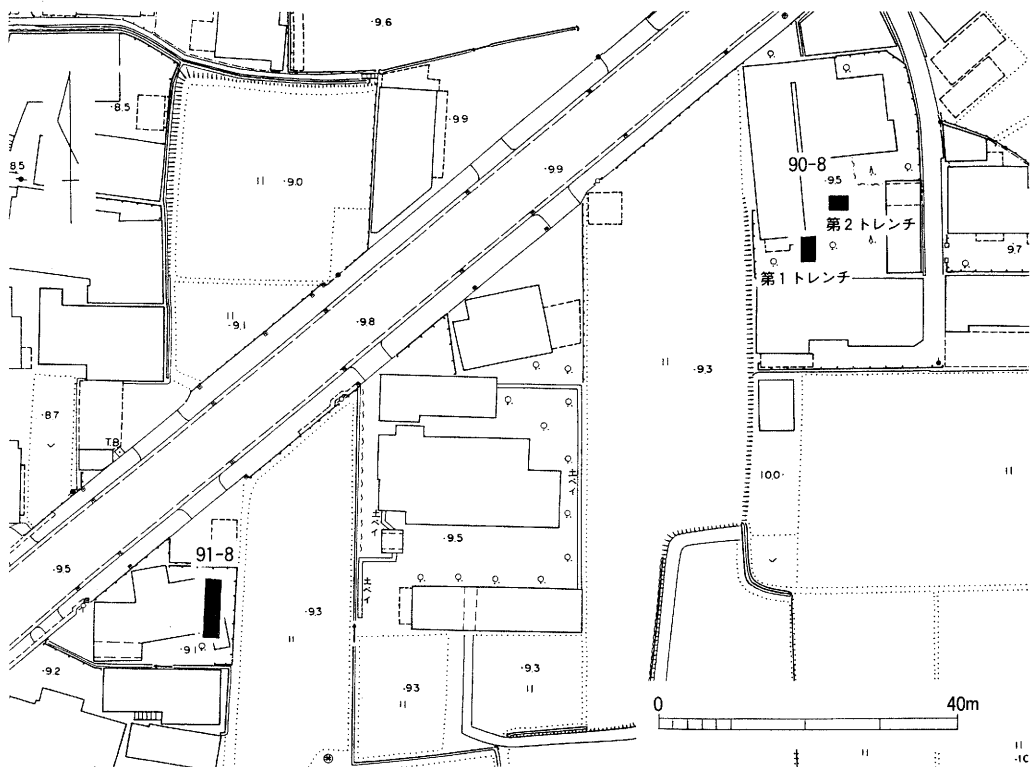
粒を少量含む。焼成は良好である。

28は、高台である。Pit 4 から出土している。明褐色を呈し、強いヨコナデを施している。黒色土器ともみられるが、中世の台付皿の高台部分の可能性が高い。

## 第15節 90-8区の調査

### 1. 位置 (PL. 3、第7図)

調査区は遺跡のほぼ中央北より、現在の府道堺阪南線と双子池下池の間に位置している。地形分類上は男里川が形成した氾濫原上に立地しているかたちとなる。当調査区から南方約150mの地点では、古代および中世の掘立柱建物が検出されており、当地周辺から南方にかけては、比較的古代・中世遺構の分布密度が高いことが知られている。



第7図 男里遺跡91-8・90-8区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・17)

南側のトレンチを第1トレンチ、もう一方を第2トレンチと呼ぶ。

第1・第2トレンチともに基本的な層序は変わらない。表土である暗灰色土（耕作土）と、明橙色砂質土（床土）をとりのぞけばプライマリーな堆積層が露呈する。順に暗褐色混じり淡灰色土、褐色混じり明灰色土、そして第5層である淡灰褐色粘質土、第6層の灰褐色混じり黄色粘土とつづき、地山である黄灰色粘土に至る。ただし、第2トレンチでは、第6層は落ちこみの埋土となる。

遺物は土師器片が第3層以下第5層まで出土するが、みな細片ばかりで各層の年代を判別できるものはなかった。

## 3. 遺構 (P L. 5・17)

第1トレンチでは、切り合い関係にある2条の溝、およびピットが検出された。溝は下層のものをSD01、上層のものをSD02と呼ぶこととする。

SD01は第6層の上面から地山を深く掘りこんで形成されている。肩は滑らかに落ちこむが底部はでこぼこした起伏が多い。底部は南西へ向かって傾斜している。幅1.6m、深さ50cmを測る。埋土は淡黄灰色土。中世の所産と思しき土師器片が若干出土している。

SD02は、SD01埋積後に掘りこまれている。肩は直線的に落ちこむが、底部はほぼフラットな面を持ち、横断面形状はほぼ逆台形となる。底部はSD01同様南西へ傾斜している。SD01と比較すると規模は小さくなり、幅90cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。SD01・02、両者とも中軸線の方法は同一で、N32° Eとなる。

ピット1は、東壁面で確認されたため平面形は不明である。柱穴は伴わない。埋土は淡灰褐色砂質土である。

第2トレンチでは、落ちこみとピットが検出された。

ピット2は落ちこみの上面で確認された。柱穴は伴わない。埋土は淡灰褐色土で、直径24cm、深さ20cmを測る。遺物は出土しなかった。

ピット3はトレンチ南壁に一部がかかっているため全形は知り得ない。柱穴は検出できなかった。検出面はピット2と異なり、第5層上面である。埋土は

ピット2同様淡灰褐色土、深さは28cmを測る。遺物は伴わない。

落ちこみは、第2トレンチの西半部で確認された。約10cm程西へ向かって落ちこんでいる。落ち込みを挟む東西面は、どちらもほぼ水平である。ただし埋土は第1トレンチ第6層とまったく同じであるため、遺構としての「落ちこみ」ではなく、自然地形としてとらえるべきかもしれない。遺構であるか自然地形であるかを判断できる材料は得られなかった。

## 第16節 90—11区の調査

90—11区は、遺跡の中央北辺、後述の90—12区のすぐ西側に接する位置にある。現状は更地であったが、古老の話しによればごく最近までは、水田に挟まれた小さな用水池であったという。

実際に表土層である盛土層を取り除くと、耕土とおぼしき灰色土層が露呈した。ただしこれは現地で耕作していたようすのものではなく、客土された様子がかがえた。この下層には灰色系砂質土層、灰色系粘土層、そして最下層である淡緑灰色系シルト層へと続いていく。

第1層である盛土層は層厚40cm、第2層は約20cm、第3層約20cm、第4層約30cm、そして最下層は1m以上の層厚を測る。

最下層直上面付近の第4層からは、現代の瓦片などが出土するため、きわめて最近まで「池」の形態を残していたことがうかがえた。恐らく第2層に当たる灰色土層は、池をうめる時点で運びこまれたものと考えられる。

遺構は検出できなかった。

## 第17節 90—12区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第8図)

調査区は遺跡の中央北端付近、現在の男里集落でも最北端の位置を占めており、集落を縦断する市道に面した位置にある。男里遺跡の縄文時代遺構検出地に非常に近く、当地から南側へ約50m程しか離れていない。



当地の北西方向には広く現在の水田面が広がるが、より北側には近年発見された男里北遺跡が位置している。周辺の状況として簡単に紹介しておこう。

当調査区より約100m程北側まではほぼ同一レベルで水田が続くが、そこから一度段丘崖を介して約1m程低い水田面が広がっていく。この付近が古代から中近世の遺物が散布する男里北遺跡である。今後の調査により、内容が明らかになり男里遺跡との比較検討が行われよう。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・18)

基本的な層序を大分すると、上から順に盛土層、暗灰色系土(耕土)層、黄灰褐色土(床土)層、そして暗灰褐色土層と暗黄灰色土層からなる旧耕土・床土層、が続く。この下層では、4層で構成される灰色系土層群(第5層)が大別できる。これより下層では遺物が多く包含されている層群が存在する。褐色混じり暗灰色土層(第6層)、クサリ礫混じり暗灰色粘質土層(第7層)、淡青灰色粘土層(第8層)などが遺物を多く含んでいる。この下層では、黄褐色あるいは暗青灰色の礫層となり、遺物は認められなくなる。

遺構は確認できなかった。

## 3. 遺物 (P L. 8)

当調査区では多くの遺物が出土した。しかし、どれもみな細片で状態が悪く、実測・観察できたものは少なかった。

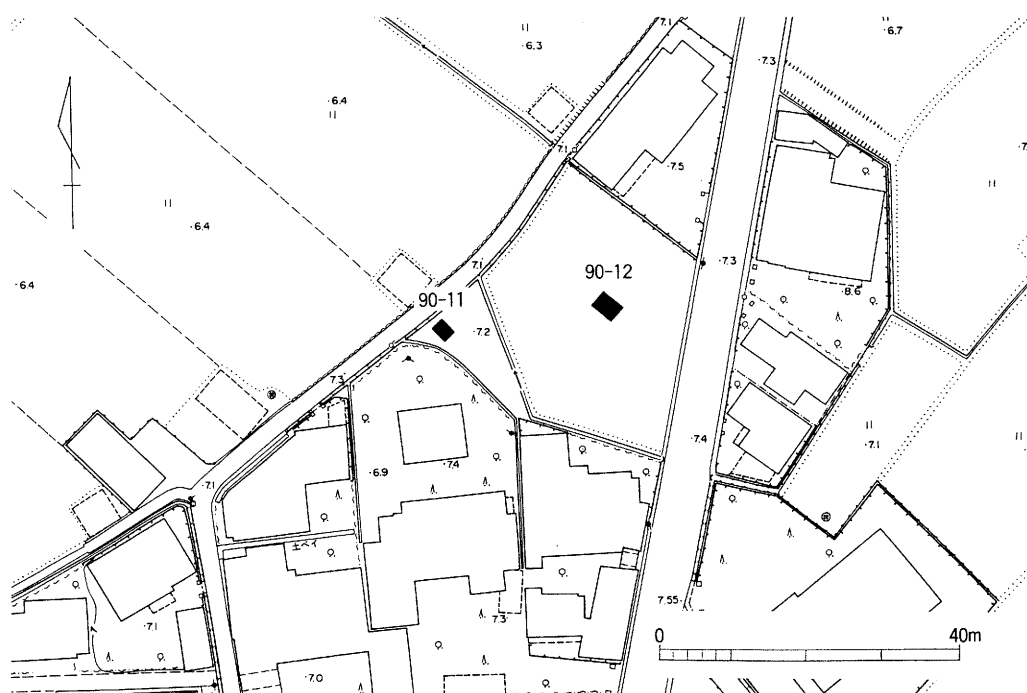
29~31は弥生土器である。29は甕である。口縁端部には内傾する面を持ち、その上部を内上方に少しつまみあげる。器壁は内外面共に摩滅が激しく、調整痕はほとんど判別できない。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好な製品。30は甕の底部だろうか。比較的荒めの胎土を持ち軟質の製品である。31はやや新しい時期の所産となる甕である。これも器壁はほとんど剝落しており調整不明。29・30は第8層より出土、31は第7層の出土。

32・33は須恵器・杯蓋・杯である。33の口縁端部はいびつに歪んでいる。32は天井部を内外面共に美しくナデあげて仕上げている。つまみはまったく残っていない。両者とも第6層から出土した。

34～36は土師器・杯である。34は口縁端部を内方に大きく肥厚させ、端部上面にわずかに平坦面を持たせている。摩滅が激しく調整は不明。35は口縁部端部を内方に少しつまみだす。器壁剝落のため、調整、暗文の有無は確認できない。34は第7層、他2者は第6層の出土。

37は瓦器碗である。高台は外方へ向かってしっかりとふんばるように作られている。体部の器壁も比較的厚い。焼成は非常にうまく、軟質の製品。第5層より出土。

この他にも図化できなかったものの、第7層からはクシ描き直線文がわずかに残る弥生土器細片が出土している。



第8図 男里遺跡90-11・90-12区地形図

## 第18節 90-13区の調査

### 1. 位置 (PL. 3)

調査区は男里集落のほぼ中央にあたり、府道からわずかに北側に入った位置にあたる。ここの地形は分類すると自然堤防上に立地していることになる。第

1 節で述べたように、最近の調査で当調査区の西約10mの非常に近接した地点の調査で古墳時代遺物群が遺構に伴って出土している。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・18)

調査区内の基本的な層序は盛土層、黄色粘土混じり暗黄色土層、暗黄灰色粘質土層を取り除くと遺物包含層が露呈する。第4層にあたる暗灰褐色土層、暗黄灰色土層、暗灰色土層、そして第7層の赤褐色混じり暗灰色土とつづく。第7層は均質ではなく一部砂礫が混じる部分がある。第4～7層は粘度が高く非常に軟弱で安定しないが、堆積後はプライマリーな状態を保っているようである。当調査区出土遺物は大半がこの層群からのものであるが、みな細片が多く保存の状態は良くない。

これらより下層では主に砂礫で層が構成されている。第8層の暗灰色砂礫層、そして地山である暗黄灰色含礫砂層が存在する。この砂礫層は上部の各層群に比べて、よく締まっているが、第8層では中世遺物が砂礫の間隙に混入している。第9層になって砂礫の色調がやや明るくなり遺物が認められなくなる。

当調査区の西側、古墳時代遺物群出土地では、地山は基本的に粘土層であった。当地の層序とは大きく異なっている事が確認された。

## 3. 遺物 (P L. 8)

遺物は、古代から中世に至る遺物が比較的多く出土したが、細片であることが多く図示できるものも少なかった。

39は須恵器・杯蓋片、40は土師器の底部および高台部片である。中世の皿だろうか。41は土師器・土釜で、胎土には片岩粒が多量に含まれる。はりつけられる頸は低い。口縁は残存していないが頸部で大きく外上方に屈曲していくことがうかがえる。いわゆる紀井系のもの。42は土師器・小皿で、口縁部はヨコナデが施されるが、底部の内外面は整形後調整は行われぬ。胎土は精良で色調は淡橙灰色、口径7.8cmを測る。43は同じく土師器・皿である。口縁部内外面はヨコナデで仕上げられるが、底部外面にかけては整形時の指頭圧痕が顕著に残る。器壁は全体的に厚い。胎土は一部長石粒を含むが、精選された精良な

もので色調は乳白色を呈す。いわゆる白色土器である。44は土錘である。ナツメ様の形態を取る。円孔は中心からは大きくずれているが、竹管を用いたのかほぼ真円である。全体に摩滅が激しく欠損部も大きく保存の状態は悪い。

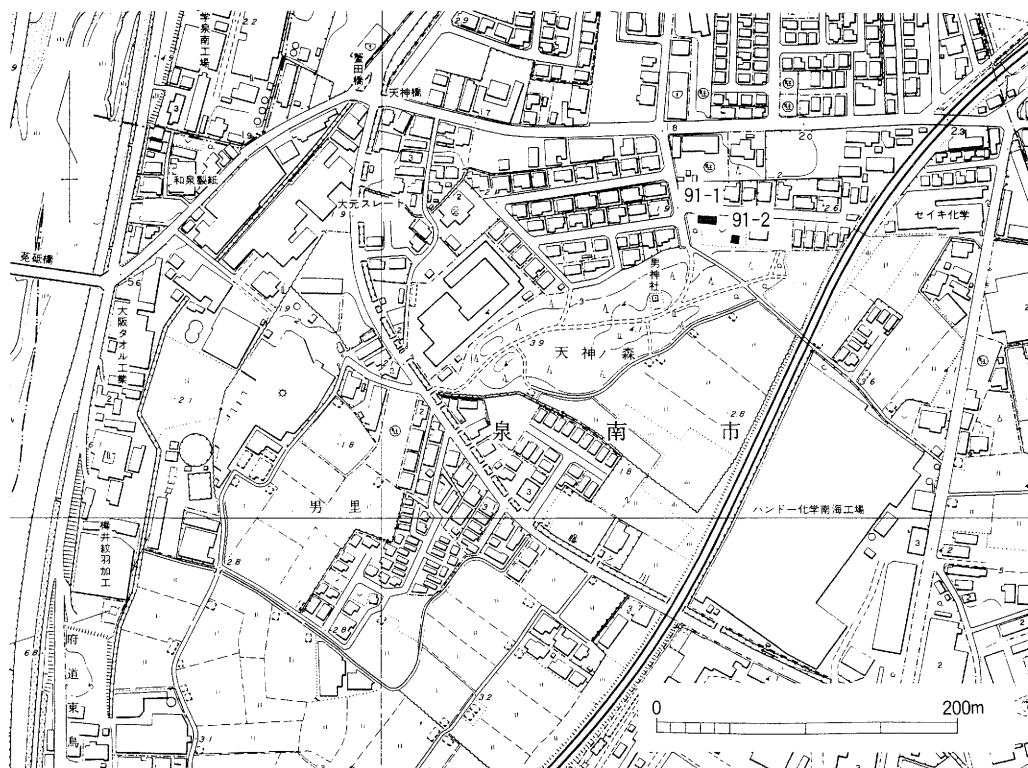
### 第3章 天神ノ森遺跡の調査

#### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第9・10図）

天神ノ森遺跡は市域の北西端の海岸部に近い洪積段丘低位面上に立地しており、市内遺跡群の中でももっとも海岸部に近い遺跡の一つに数えられる。この西側には男里川旧河道の存在が想定されており、これをうら付けるように周辺にはかなり低湿な平地が広がっている。遺跡の現状は一部周辺に開発がおよび住宅地となっているほかは、大半が神社地として利用されている。この神社地内は砂地が広がり、周囲との標高を比すと1～2m程高いことから、一見すると砂丘のようにみえる。周囲の住宅あるいは田畑との景観とは一線を画す。

遺跡発見の発端は古く戦前にさかのぼる。昭和9年、災害により倒れた樹の根元付近から、砂中に埋もれた状態で須恵器甕が発見されたことがその端緒である。

この後長らく調査は行われず、ようやく近年になって当遺跡内での発掘調査



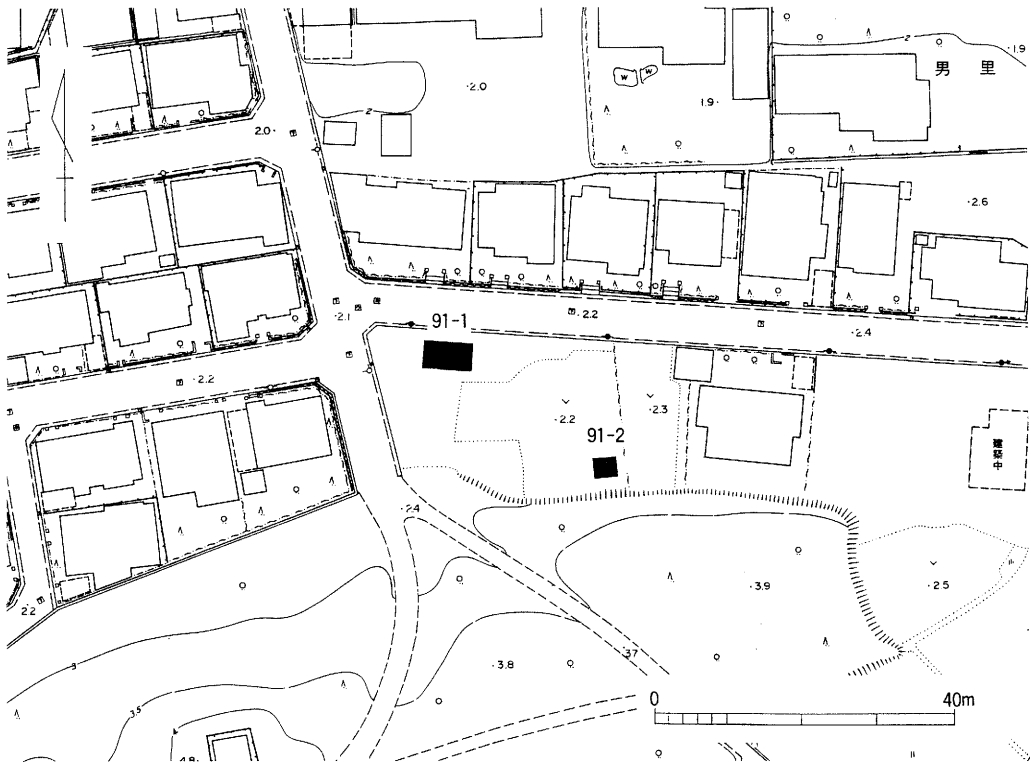
第9図 天神ノ森遺跡調査区位置図

件数が増加してきた。しかし、顕著な遺構・遺物が発見されたことは少なく、層序をみても、もっぱら表土・盛土直下に砂あるいはシルトが介在しすぐ地山である砂礫層に至ることが多く、いわゆる遺物包含層の確認はできていない。

ここでは現在のところ、その分布範囲の追求を行っている段階といえよう。今年度は2件の発掘調査が行われた。

## 第2節 91-1区の調査（P.L. 7、19）

遺跡内での位置はほぼ中央北より、先述の神社地に北接する位置にあたる。現状は既に宅地化されたもので、宅地化前の状況を伝える要素は全く無い。ただし、近年まで当地周辺は沼状の地形が残っていたと言う。



第10図 天神ノ森遺跡91-1・91-2区地形図

基本的な層序は、ごく最近施された盛土層の直下より暗青灰色系粘土層、暗灰色砂礫層が続いていく。このうち第2層にあたる粘土層は最近の新しい盛土

と思われる。第2層下部からの激しい湧水にみまわれ第3層以下に掘削することはできなかった。

遺構・遺物は確認できなかった。

### 第3節 91-2区の調査（P.L. 7、19）

調査区は91-1区の東接するように位置している。遺跡の中央北部にあたる。

基本的な層序は、第1層・耕作土である暗黄灰色土層、第2層・整地層にあたる淡黄灰色砂層、第3層・最近まで耕作されていたとおぼしき暗灰色土層までがごく最近施されたものである。これ以下はプライマリーな堆積層となる。第4層・暗茶灰色砂、第5層・礫混じりの暗茶灰色砂層と続いていく。ここでも第5層付近から激しい湧水にみまわれ、以下への掘削はおこなえなかった。

遺構・遺物は存在を確認できなかった。

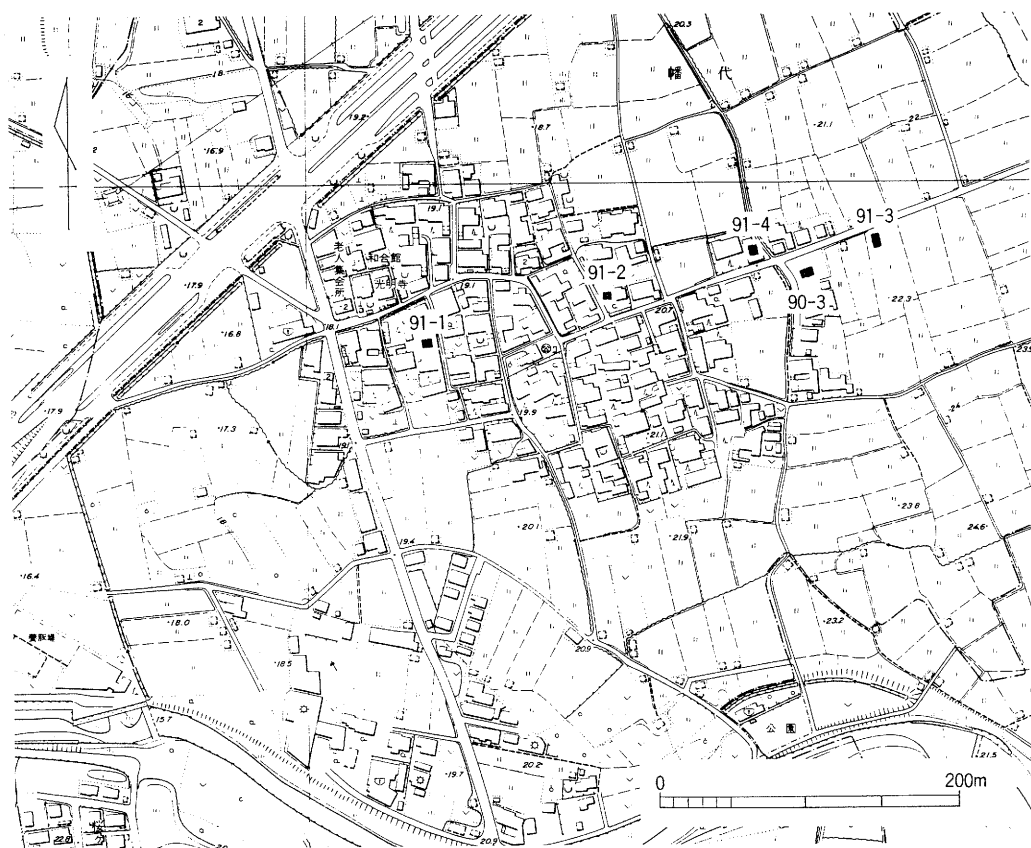
## 第4章 幡代遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1・2、第11図）

幡代遺跡は市域の西部、金熊寺川中流域の右岸に展開する。北側には男里遺跡、南には幡代南遺跡が存在し、市域でも遺跡分布が非常に多い地域である。

当遺跡ではこれまでに、平安時代後期、室町時代、そして近世と大きく3区分の盛期が認められること、そして他にも弥生時代の遺構・遺物包含層確認の可能性のあることを以前から述べている。しかし、新たな知見は得られておらず、このあいまいな状況からはさほど脱することはできていない。

しかし、近く大規模な道路設置を含め調査例が増加する事は疑いない。これ



第11図 幡代遺跡調査区位置図



により多くの歴史情報が得られるだろう。この情報から、当遺跡の内容および当地の歴史像が復原されることは疑いない。ただ、激変が予想される周辺の景観や文化財を代償にしていることを肝に念じておきたい。

## 第2節 91-1区の調査

### 1. 位置（第11図）

調査区は遺跡の中央やや西よりに位置しており、地形分類上は沖積段丘面上に立地している。現在の幡代集落は、やはり男里集落と同様、古き面影を今も伝えている。当調査区は現集落の中央西よりに位置している。

これまでの周辺の調査例では、当地より東へ約50mの地点で、中世の所産となる落ち込みが1カ所検出されている。

### 2. 層序と遺物の出土状況（P.L. 6・20）

基本的な層序は盛土層、灰色混じり暗黄灰色土層、第3層ととらえられる礫混じり暗灰色粘土層、そして地山である暗黒褐色礫層に至る。地山の上面は大きく北へ向かって傾斜している。地山の層厚は確認できただけで、約60cm以上を測るものであった。

第2層と第3層の間には、カクランあるいはブロック状に暗黄色土や褐色混じり淡灰色土が介在しているが、大まかに第2、第3層そして地山へという層序として、とらえられよう。

遺構・遺物包含層は認められなかった。

当調査区で確認された地山は金熊寺川の氾濫で運ばれた砂礫からなる堆積層であると考えられるが、層形成の時期を決定する材料は確認できなかった。

## 第3節 91-2区の調査

### 1. 位置（第11・12図）

調査区は現在の幡代集落のほぼ中心に位置し、国道26号線から南へ約200m

の地点である。地形分類では沖積段丘面上と考えられるが、今回の調査では氾濫原上のような砂礫層を検出している。

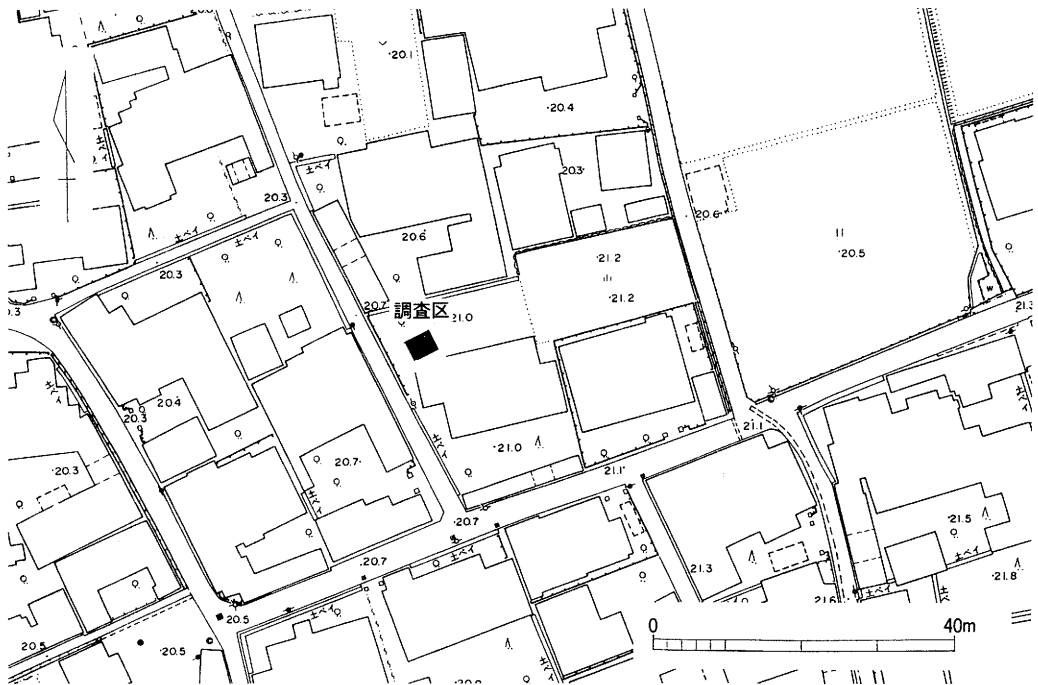
トレンチは、約2 m×約2 mのものを1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 6）

旧建物の現代盛土を約30 cm除去すると、褐色および暗褐色の整地層とみられる盛土が厚さ約30 cmで確認される。

これらを掘削すると河川性の堆積とみられる暗褐色の砂礫層が検出される。上面の標高はT.P.+20.3mを測る。遺構検出を行ったが遺構は検出されなかった。また、遺物は出土しなかった。

なお、この層を掘り下げると下層へ行くほど礫の径は大きくなり、湧水が始まり、氾濫原上を掘削している時の様な状態を呈すことになった。



第12図 幡代遺跡91-2区地形図

## 第4節 91-3区の調査

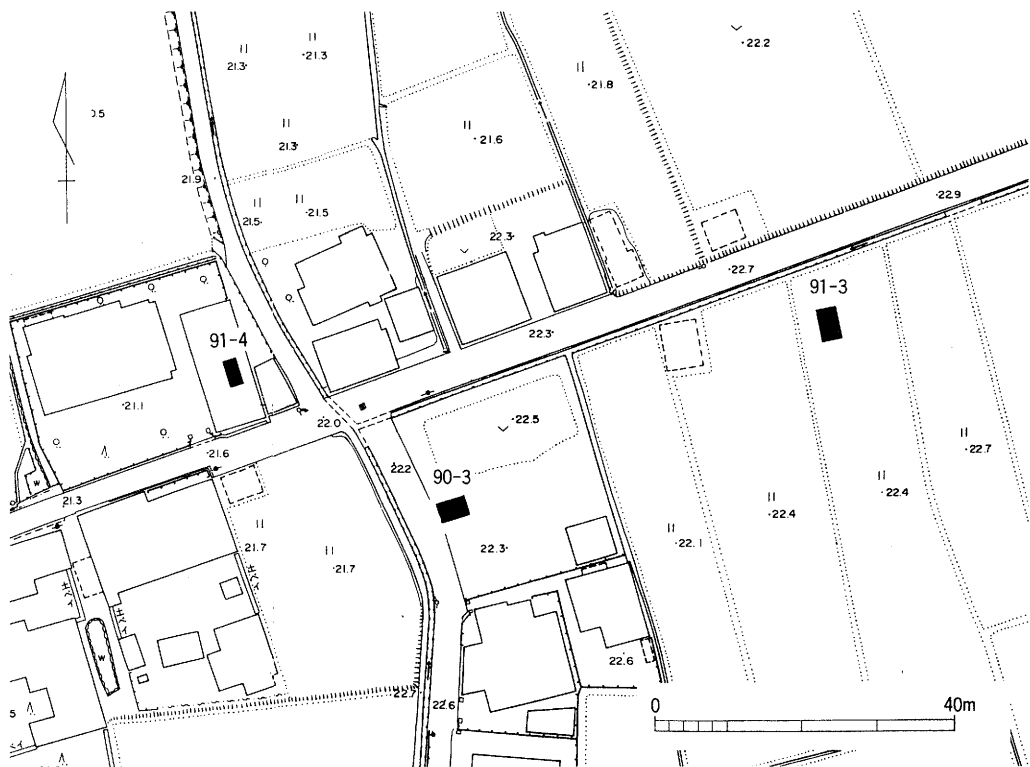
### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は、現在の幡代集落の東のはずれに位置し、国道26号線から南東へ約300mで男里川右岸の沖積段丘面上に立地するものと思われる。

トレンチは約4m×約2mのものを1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 6)

現代耕土(約10cm)及び3層の旧耕土(約30cm)を除去すると黒褐色のシルト層が検出される。この上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。さらに下層には、暗褐色シルト、暗褐色礫混シルト層と続くが遺構は検出されなかった。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。



第13図 幡代遺跡91-3・91-4・90-3区地形図

## 第5節 90—3区の調査

### 1. 位置（第11・13図）

90—3区は遺跡のほぼ中央、現在の幡代集落の西端縁にあたる地点に位置している。ちょうど現在の集落の東側を南北に流れる水路が存在するが、当調査区はこの水路よりもさらに東に位置している。これまで調査がさほど行われていなかった区域である。

地形分類的にはやはり、沖積段丘面上に占地しているといえよう。

### 2. 層序と遺物の出土状況（P L. 6・21）

基本的には、盛土層、耕土である暗灰色土層および淡灰白色土層が続き、以下には旧耕土・床土層を構成する層が認められる。黄灰色土層、黄色混じり灰色土層、マンガン混じり淡灰色土層、灰色土層、マンガン混じり暗灰色土層へと続いていく。

第9層にあたるマンガン混じり暗灰黄色土層から第10層の褐色混じり暗灰色土層では土器細片が多量に含まれている。

これより下層では黒褐色系土層が中心を成す。なお、以下の各層内には遺物はまったく含まれない。順に暗灰色混じり黒褐色土層、第12層にあたる黒褐色土層、やや色調が浅くなる暗茶褐色土層、わずかに砂質が混じる暗褐色粘質土層、暗黒褐色土層、クサリ礫混じり暗黒褐色粘質土層へと至る。

当調査区の層序は大別して、盛土層、第2～8層の耕土・旧耕土層、遺物包含層である第9・10層、そして第11層以下の黒褐色系土層に分類できよう。

### 3. 遺物（P L. 8）

遺物は第9および10層から細片が多量に出土している。この遺物の出土が認められるのは旧耕土にあたる第5層のみである。

実際に図示できたものは1点（45）のみあった。45は土師器・土釜の口縁部片である。屈曲しながら外上方に伸びる口縁部は、端部を一度たたみこむ様に折り曲げ、上方につまみだす。その結果、端部には平坦な面を持たされる。本

製品はいわゆる紀井系の土器であるがそのなかでも最終段階の形態をとるものである。胎土には砂粒が多く含まれており、粗い印象を受ける。第5層より出土した。

この他には図示できなかったが、第10層から瓦器碗の底部片などが出土している。また、第5層からは瓦質土器・鉢の口縁部片が出土している。これは15世紀に顕著な、口縁端部外面に広い面を持つすり鉢様の製品ではなく、13世紀頃の東播系須恵器にみられる、端部外面を外側に肥厚させることにより端部に面を形成させるタイプに近似している。細片なので規模は不明だが、一般的な瓦質土器のすり鉢に比べるとかなり小ぶりの製品であると思われる。

## 第5章 兎田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

兎田遺跡は、現在の兎田集落内の開発による試掘調査で中世の包含層が確認されたことによって周知されるようになった。範囲は兎田集落を中心として、西は新家の丘陵の麓、東は榎井川まで広がっている。地形的には遺跡の大部分は、榎井川左岸ではほとんど見られない沖積段丘面上に立地していると考えられている。

遺跡が周知されて数年経つものの現在まで、全容が把握できる調査は全く行なわれていないが、周辺の遺跡の様相はかなり解明されてきている。

周辺の遺跡を概観したい。西側の新家の丘陵上には、弥生時代では大阪湾が一望できる丘陵の先端部分に、高地性集落と考えられる新家オドリ山が立地する。古墳時代では、朝鮮半島の影響を強く受けた須恵器が出土したフキアゲ山古墳群、同じく初期須恵器の出土した新家古墳群などの泉南市内でも数少ない古墳が密集している。

遺跡東側の榎井川に接して、右岸の沖積段丘面上に三軒屋遺跡が立地している。特に注目されるのは、弥生時代においては、男里遺跡と同様、比較的長期間にわたる、規模の大きな拠点集落としてとらえられている。高地性集落の範疇に含まれる新家オドリ山遺跡とは、非常に強い結び付きがあったものと考えられている。

古墳時代においても集落は存在したようで、古墳時代の土器とともに、韓式系土器なども出土していることから、新家の丘陵上に立地する古墳群を墓域とする考えが指摘されてきた。しかし、近年、三軒屋遺跡内でも現在の条里水田の下層から削平された状態で丘陵上の古墳を上回る、10m以上の規模を持った円墳または前方後円墳が数基みつかっており、様々な課題を残している。

以上のような周辺の遺跡の様相の中、兎田遺跡はちょうどこれらの中間地点にあたる。今後の調査の進展により、これらの課題を解決する糸口が見えてくるはずである。

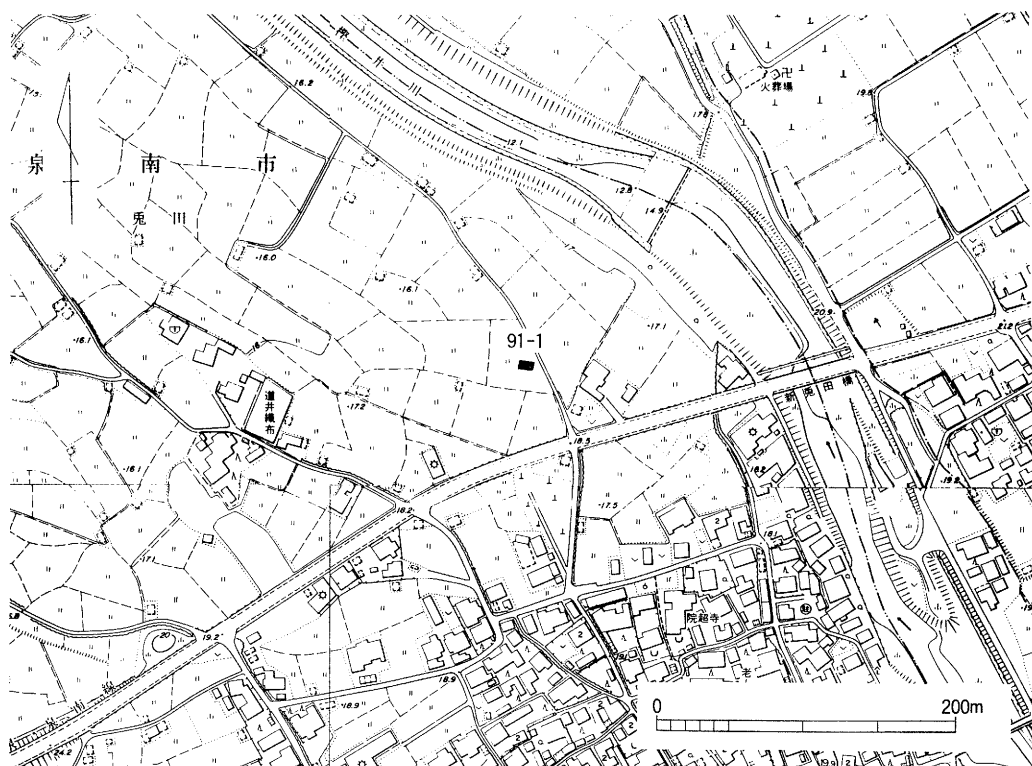
## 第2節 91-1区の調査（第14図）

### 1. 位置

調査区は、遺跡の北西端部にあたる。現在の兎田集落からやや離れており、府道和泉泉南線より北側約100mの水田内に位置する。府道と泉南線より北側で調査が行なわれたのは初めてである。

地形的には檜井川の旧河道があるものと推定されていた。

トレンチは1.5m×2.5mのものを1カ所設定した。



第14図 兎田遺跡調査区位置図

### 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 7）

約30cmの盛土を除去すると、旧滋味土及びその床土層が検出された。これらの下層から河川性の堆積とみられる砂礫層が検出される。

この砂礫層の上面で遺構検出を行なったが遺構は検出されなかった。さらにこの砂礫層を掘削すると砂礫層の上層から約50cm付近で礫の径が約30cm～40cm

と大きくなるのが確認され、旧河道または氾濫原に相違ないことが確認された。  
砂礫層は比較的新しいもののように思われるが、遺物は出土しなかった。

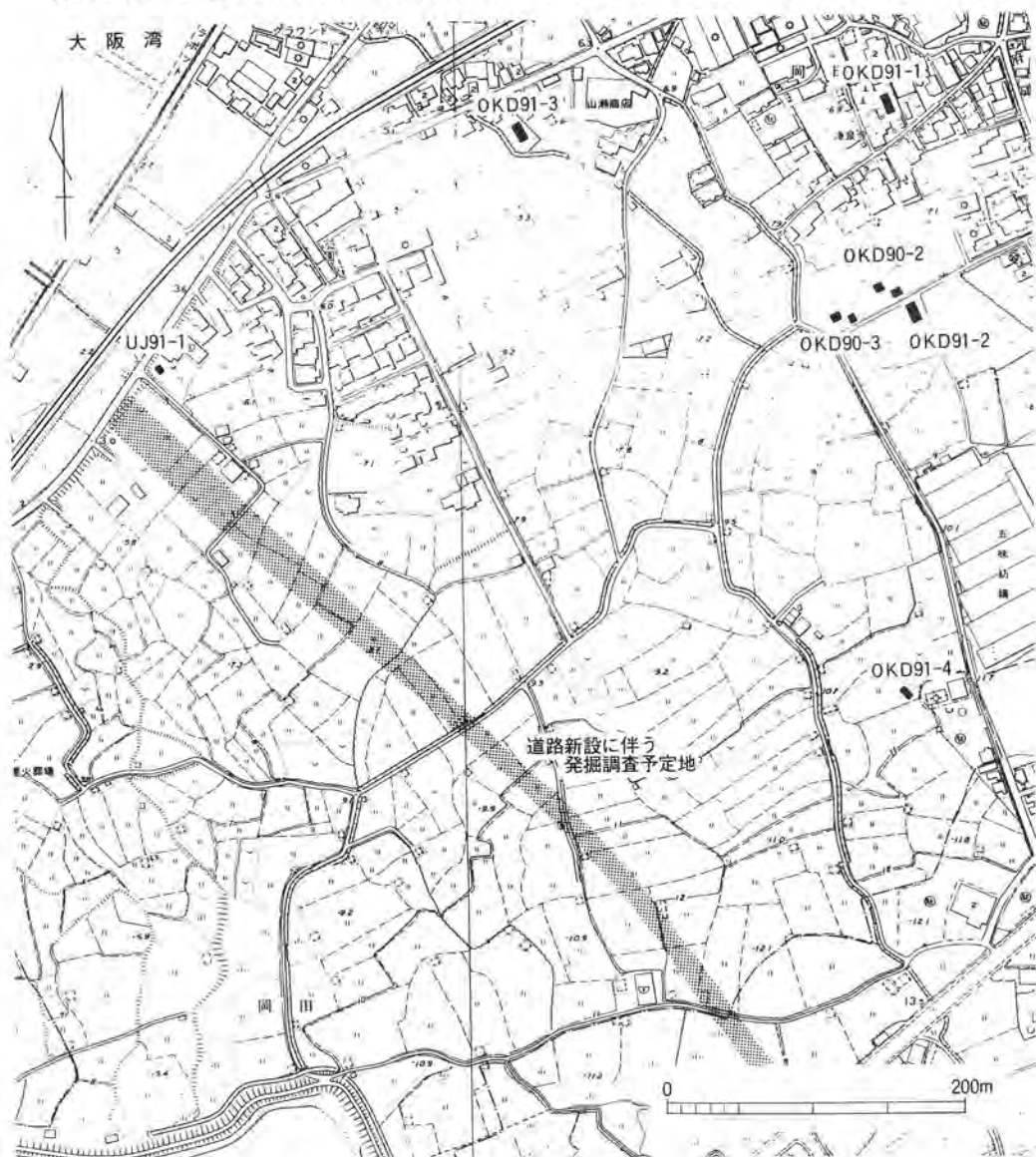


## 第6章 岡田遺跡・氏の松遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

岡田遺跡は、東西約450m、南北約650mに及び、市域では男里遺跡に次ぐ規模を持つ遺跡である。

分布調査で発見されて以来、数年経つものの遺跡の全容がわかる調査はほと



第15図 岡田・氏の松遺跡調査区位置図

んど行われていなかった。しかし、小規模な調査の積み重ねにより徐々にその一端が明らかになりつつあるのである。特に今年度報告分では、初めて遺構の存在を確認したほか、これまで室町時代に限られていた遺物が、弥生時代や古代にまで遡ることが判明した。

地形的には樫井川左岸の低位段丘面ないしは中位段丘面上に立地している。同様の立地を示す周辺の遺跡では、西側に接して岡田西遺跡、氏の松遺跡、南側には北野遺跡、中小路遺跡、大苗代遺跡、新伝寺遺跡、東側には今年度新たに発見された岡田東遺跡などがあり、樫井川左岸の段丘面上の遺跡の様相は近年大きく変わってきている。

特に岡田西遺跡は、91-1区の市道市場岡田線新設に伴う調査において古代末から中世初頭の本格的な水田開発に伴う灌漑用水路や、それに伴う水路、無数の鋤溝が検出され、中世を通しての生産の「場」が確認されている。

これらの開発は、これまで荒地と考えられる場所に、大規模な水路を掘削し水を引き込んでおり、相当大規模な労働力を組織的に駆使し得る集団の存在が推察できるのである。

この集団の集落はまだ未検出であり、この付近の地形的な類似性を考えると今後、岡田遺跡を中心とした調査の進展により、樫井川左岸の段丘面上の開発のしくみの解明に期待が持てるのである。

一方、氏の松遺跡は、岡田西遺跡と同じく、平成元年度の市道市場岡田線新設に伴う試掘調査によって発見された遺跡である。

立地においては岡田遺跡を中心とした樫井川左岸の段丘面上であるが、平成元年度の試掘調査では、この遺跡の付近ではみられない縄文土器が出土している。今後、岡田西遺跡に引き続いて行われる市道市場岡田線新設に伴う発掘調査によって明らかになってゆくものと期待される。

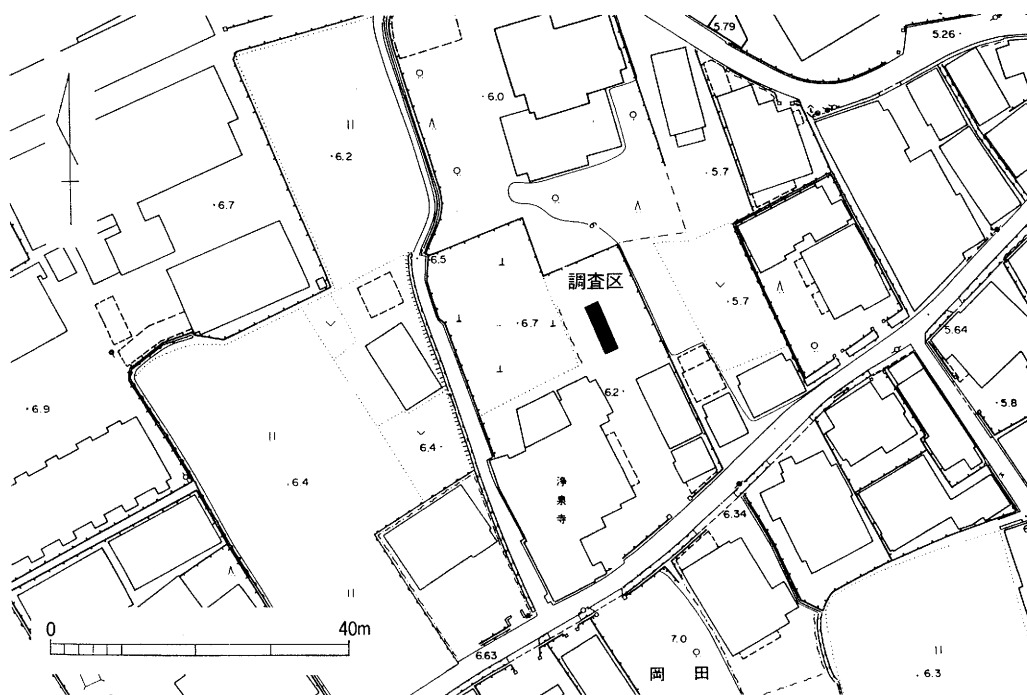
## 第2節 OKD91-1区の調査

### 1. 位置（第15・16図）

本調査区は遺跡の北東部に位置し、岡田集落のやや南の外れの浄泉寺の境内

である。外れとはいえ、現集落の中で調査が行われたのは初めてである。調査区の東側には寺の墓地があり、江戸時代初期の五輪塔もいくつか存在するようである。

トレンチは約5 m×約1.5mのものを1カ所設定した。



第16図 岡田遺跡91-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・22)

ガラスビンなどを含む近代以降の盛土及び整地層約50cmを除去すると、灰色の砂質土や部分的に砂を多く含んだ暗黒灰色シルト層がみられる。約20cmから約40cmを測る。近世の遺物を含んでおり上層と同様、この時期の整地及び盛土層であると考えられる。

これらを除去すると黒褐色のシルト層が露呈する。厚さ約20cmを測る。この調査で検出された遺構は、ほとんどがこの面から切り込んでいることが確認された。この黒褐色シルトである3層からもわずかではあるが中世の瓦などが出土している。

これら土層の堆積状況を見ると生活の痕跡が始まって以来、一度も農地とし

て利用された形跡はなく、中世から延々と生活の場として利用され、整地などが施されてきたのであろう。

この下層には地山とみられる黄色のシルト層が検出された。この上面から切り込む遺構は検出されなかった。

### 3. 遺構 (P.L. 7・22)

遺構のほとんどは黒褐色シルト層から切り込んでいる。断面の観察ではかなり切り合いを確認しており、黒褐色シルトの上面でかなり長時間の生活が行われたものと考えられる。

遺構の大半は土坑であるが、小規模な調査のため全体をとらえることができなかった。いずれも不整形を呈し、深さは約20cmから約40cm程度である。

埋土は主に黒灰色、黒褐色系でいずれも濁った色を呈している。

土質はシルト質と、小片の瓦と砂礫が含まれるものに分けられるが、いずれも整地層の土に近似しており、人為的な埋込みの様に思われる。特に、砂礫と小片の瓦が入るもの (S X04・11・12) は、廃棄坑のような性格を持つものであろうと考えられる。

ピットもいくつか確認したが、いずれも柱穴になるとは考えられず、土坑と同じ様なものといっておよいであろう。

### 4. 遺物 (P.L. 29、第17図)

出土した遺物はほとんどが瓦であった。大半は小片であり図化に耐え得るものは少ない。今回図示したものは、すべてS X11より出土している。

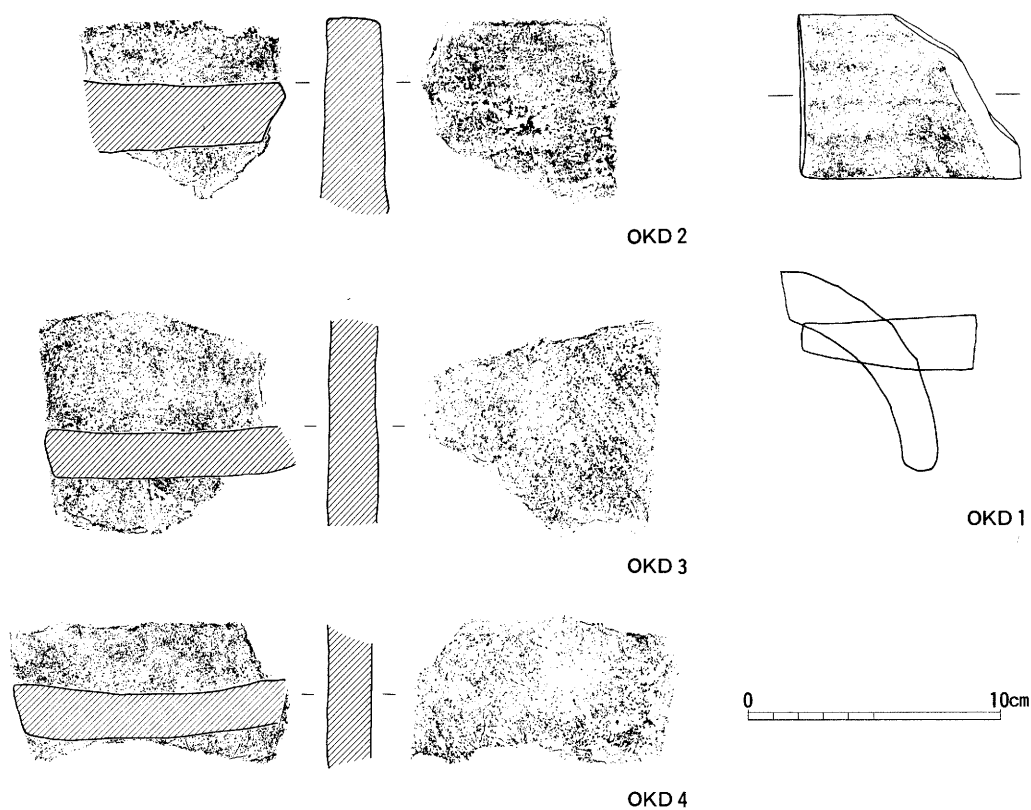
1は丸瓦である。玉縁部分は欠損している。もとは半裁円筒形状を呈していたと思われる。凸面はヘラケズリを施し、凹面は端縁に向かって右方向へのヘラナデが施される。焼成は不良で全体に摩滅が著しい。胎土はやや粗く、径3mmほどの黒色粒、白色粒を多く含む。

2～4は平瓦である。

2は、やや厚手で、凸面にわずかに糸切り痕が認められる。側縁、端縁ともしっかりとした面取りが行なわれている。3にも、凹面にわずかに糸切り痕が

認められる。いずれも焼成は不良で、摩滅が著しい。胎土は粗く、径3mmほどの砂粒を多く含んでいる。

なお今回の調査により、近世の整地土、廃棄坑とそこから中世から近世にかけての瓦が多く出土したことは、現在の浄泉寺の成立を知るうえで貴重な手がかりとなるものと思われる。



第17図 岡田遺跡91-1区出土の平・丸瓦

### 第3節 OKD91-2区の調査

#### 1. 位置 (第15・18図)

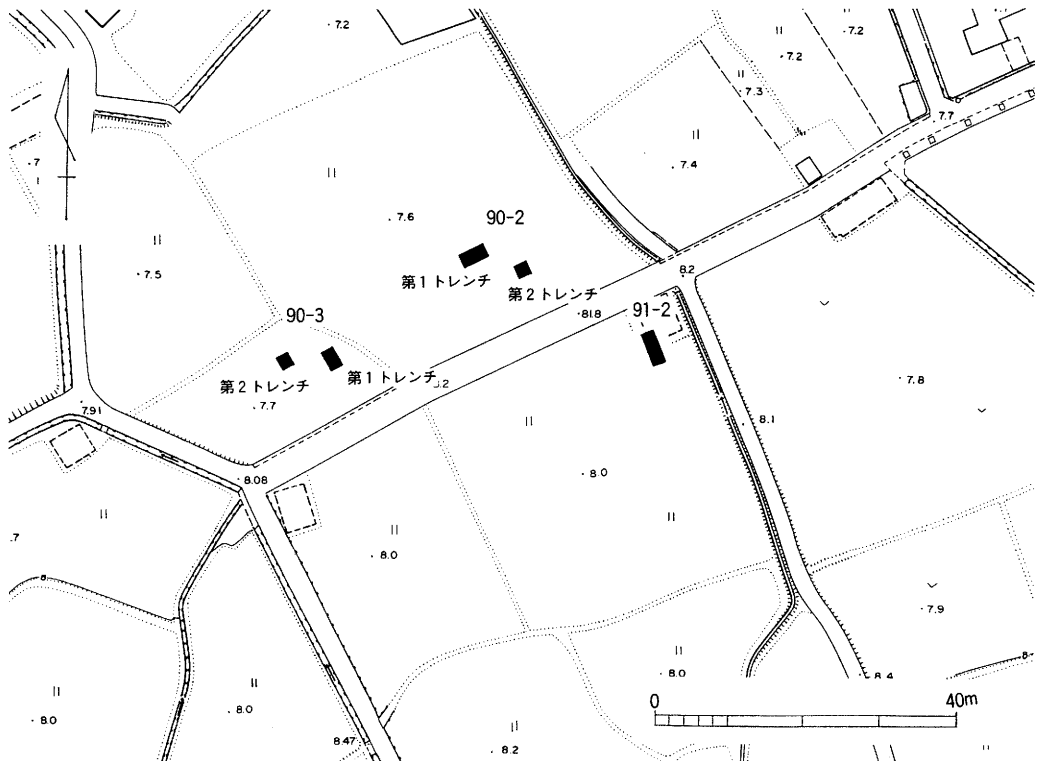
調査区は遺跡の中央付近やや北よりに位置している。地形分類上は洪積段丘低位面上に立地している。現状は、南北に長く伸びる岡田地区の西側、広く広

がる耕作地域の一面を占める。岡田地区では周辺の調査例は少ないが、先年度と今年度の3つの調査区が周辺に集中している。その距離はそれぞれ数十mと非常に近く、指呼の間にあるといえよう。これらの調査区では遺構・遺物包含層が確認されており、歴史を再構成していく上で貴重なデータが得られた。

## 2. 層序と遺物の出土状況 (P L. 7・22)

調査時には地表層であった耕土層はすでに取り除かれていたため、実測図面では耕土層はあらかせなかったが、本来は約20cmの層厚を測る暗灰色土層が地表層として存在した。層序は、第1層である黄橙色シルト(現代の床土)層の下層に旧耕土層が5層認められた。各層厚は約5cm内外と比較的薄いものである。

これより下層には地山との間に第7層である黄褐色シルト層が介在する。第7層は一見地山の粘土と判別し難いが、実際にはわずかに中世の所産となる遺物が含まれている。この上面が遺構面となる。地山は明黄白色粘土層である。



第18図 岡田遺跡91-2・90-2・90-3区地形図

### 3. 遺構 (P L. 7・22)

遺構は、ピット、溝、落ちこみなどが検出された。

ピット1～3は柱穴を伴うものである。特にピット1の残存状況は良く深さは30cm以上を測る。ピット間の距離はピット1ーピット2の間が2m、ピット1ーピット3が2.1m、ピット1ーピット4の間は2.4mをそれぞれ測る。埋土はピット3が暗褐色土、これ以外はみな暗灰褐色土である。柱穴埋土はみな灰色砂質土であった。

溝は2条確認できた。どちらも浅く、耕作に伴って刻まれた鋤溝の可能性が強いものである。埋土は灰色砂質土。

落ちこみはトレンチの南北両端で検出されている。平面形を確認できないため落ち込みとしてとらえておくが、浅い溝あるいは土坑の可能性もあろうか。埋土はマンガン混じりの灰色粘質シルトである。

### 4. 遺物

遺物は第6層と第7層から出土している。各層から出土する遺物は特に傾向は認められない。遺物の大半は瓦器が占め、ごく一部に中世の須恵器・土師器と古代にまでさかのぼる可能性がある須恵器片が含まれている。

地山の直上層である第7層も中世の所産となることが確定できるだけの資料は得られている。

全体に遺物の保存状況は悪く、細片ばかりで図示に耐えるものはなかった。

### 第4節 OKD91ー3区の調査 (P L. 7、第15図)

91ー3区は遺跡の最北縁に位置している。遺跡の北端は現在のところ、大阪湾に沿うように北東から南西に走る道路で区切られている。調査区はこの道路に面した地点にあたる。岡田遺跡自体発見から日が浅いため、当地域での調査もはじめてのこととなった。

ここでの基本的な層序は上から順に盛土層、暗黄灰色土層、暗灰色ブロック混じり淡灰色土層、暗灰色砂質土などが認められる。これらの各層はプライマ

リーな状態で残されている堆積層で、遺物こそ出土しないが土色などは周辺の包含層に非常に近似している。

また、調査区から北側にはゆるやかな傾斜が認められ、トレンチ内でも地山の傾斜面が確認できた。ここには暗黄灰色含礫土層が堆積している。地山は黄白色の粘土層である。

当調査区では遺物は確認できなかったが、すぐ南に広がる水田では瓦器・土師器など中世遺物が散布しており、良好な堆積層が存在していることから、付近に集落が存在することを強くうかがうことができる結果となった。

## 第5節 OKD91-4区の調査（第15図）

調査区は遺跡の中央東より、新設された市道の東に面した位置にあたる。地形分類のうえでは洪積段丘低位面上に立地している。当地の南約50mの地点での調査例では、中世遺物が含まれる包含層が確認されているが、まだ例が少なくその分布範囲はまったく不明といった状況であった。

基本的な層序は暗灰色土（耕作土）層の下層に、黄灰色土層、淡黄灰褐色土層、褐色混じり淡灰色土層、黄灰色粘土層、暗灰色土層、暗灰色粘質土層、淡黄灰色砂質土層が続く。各層とも基本的に、旧耕土・床土層ととらえることができるものだが、みな砂っぽく軟弱で非常にもろい。各層厚は約20cmの厚みを測る。

この旧耕土・床土層の直下に固く締まった黄褐色の礫層が存在し、これが地山となる。

各層の状況は、南方でおこなわれた既調査区とは、レベル差の存在をのぞいて非常に近似している。激しい湧水と壁面崩落のため断面観察のみとなったが、過去の調査例と同様の層序が確認できたと言える。



## 第6節 OKD90—2区の調査

### 1. 位置（第15・18図）

調査区の位置は遺跡の中央付近やや北より、91—2区の北側隣接地である。地形分類上はやはり洪積段丘低位面上に立地している。今回の発掘調査では上・下層2面の遺構面を確認した。これが岡田遺跡で初めて遺構を発見した調査となった。

### 2. 層序と遺物の出土状況（PL. 7・23・24）

トレンチを2カ所設定している。東側を第1トレンチ、西側のものを第2トレンチと呼ぶこととする。両者で確認された層序は基本的に同一なものであった。基本的な層序は第1層・盛土層、第2層・耕土層にあたる暗灰色土層、第3層・床土層である暗灰褐色土層が続き、この下層に遺物包含層が続いていく。

第4層・淡灰色砂質土層、第5層・灰色砂質土層、第6層・暗黄灰色砂層、第7層・褐色混じり灰色粘質土、そして地山直上層である黄色粘土混じり灰色粘土にいたりこれが第8層となる。第1トレンチでは第8層は遺構の埋土にも認められた。両トレンチともに地山は黄色粘土である。

第1トレンチでは上下2面の遺構面が確認された。検出面はそれぞれ、第6層上面と地山上面である。第2トレンチの遺構は地山上面でのみ検出された。

遺物は第4～6層で出土が認められるが、細片ばかりであった。

### 3. 遺構（PL. 7・23・24）

第1トレンチから説明を加えていく。

第1トレンチ下層遺構面では少なくとも2時期に別けることができる、非常に密集して遺構群が検出された。内容はピット、溝、土坑などである。全体に埋土も似通い、浅いものが多い。

トレンチ北壁に半分かかるような位置でSD01が検出された。埋土は第8層と同じく黄色粘土混じり灰色粘土である。SD01を掘削するとその下部からピット1が検出された。この埋土は褐色混じり淡灰白色土である。トレンチ外へ広

がるため規模は不明。

このピットと同じ埋土をもつものにSK01がある。これも落ち込みの下層で検出されており、両者を最下層の遺構としておきたい。どちらからも遺物は出土しなかった。

他にもピット、溝が検出されている。溝は細く浅いもので鋤溝と思われる。これらの埋土はみな基本的に灰色の粘土で、やや砂質が強くなるかあるいは黄色粘土のブロックが混じるかといった差異が生じるぐらいである。

一方、上層のでは5条の溝が検出された。みな南北方向に向かって伸びていくが、方向はみな同じというわけではなく、方向については規則性は感じられない。全体に北側でやや西よりに向かって伸びているようだ。埋土は淡灰色砂質土である。第6層の条面で確認された。第5層などの耕作時につけられた鋤溝だろう。

第2トレンチでは地山上面で不定形の落ち込みと、浅いくぼみ様の遺構を多数確認した。

くぼみ状遺構はどれも数cm程と非常に浅いもので、その性格ははっきりしない。ただ足跡とも考えられたが、確証できる証拠は得られない。性格不明としておきたい。落ちこみも浅いもので、しっかりと掘りこまれたものではない。埋土はやや砂が混じる灰色粘土。トレンチ外に広がるため規模は不明である。

#### 4. 遺物

遺物は両トレンチともに包含層から出土している。ただし、細片が多く図示できるものはなかった。内容は古代の所産と思しき須恵器片、中世土師器細片および瓦器片などである。

### 第7節 OKD90—3区の調査

#### 1. 位置（第15・18図）

調査区は90—2区の西側約30m付近に位置している。ここでは2カ所のトレンチを設定して調査をおこなった。

## 2. 層序と遺物の出土状況 (P L. 7・24)

2カ所のトレンチでは基本的に層序は共通している。

基本的な層序は、最近施された盛土層、耕作土である暗灰色土層、淡茶灰色土層が順に続く。ここまでが現在の耕土・床土層である。これから下層には第4層にあたる灰色砂質土層、第5層の黄灰色砂質土層、淡灰褐色土、マンガン混じり黄灰色土層が続く。これまでは層厚も10cm内外とやや厚みがあったが、これより下層は細分すれば5cm以下の層厚が主となる。細分できた場合の色調は第7層・茶灰色土層、茶灰色粘質土、マンガン混じり灰色粘土、第10層・マンガン混じり淡黄色土層、そして第11層・地山直上層の淡黄灰白色粘土層となる。この下層からは黄灰白色粘土の地山となる。

遺物は絶対量としてはごくわずかししか出土していないが、第4層から硬質の平瓦片、第10層からは中世の常滑焼・甕片や瓦器片などが出土している。

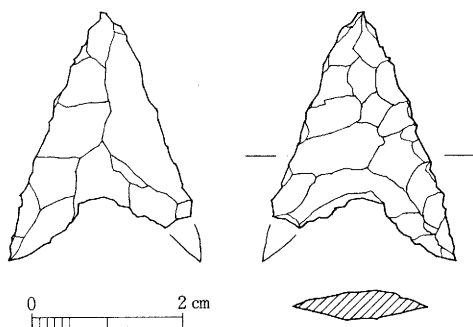
また、地山直上層である第11層からは、弥生時代の所産となる石鏃が出土している。遺構は両トレンチともに検出されなかった。

## 3. 遺物 (P L. 8、第19図)

出土の絶対量は少ないにもかかわらず、図化可能な遺物が何点もあった。以下、順に説明していく。

46は古代の須恵器・杯蓋である。摩滅のため端部はほとんど欠損しているが、一度下方に折り曲げられた端部は、大きく外方につまみだされるようすがうかがえる。胎土にはクサリ礫を含んでいる。47は土師器・皿である。摩滅が激しく、器壁はほぼ全体にわたって本来の表面は失われているようだ。胎土は精良で軟質。中世の土師器である。

48は土錘である。半分以上が欠失しているため全形は知り得ないが、恐らくラグビーボール状の形になるものと



第19図 岡田遺跡90-3区出土の石鏃

思われる。側部には縄かけの溝が2条設けられており、断面はあたかも分銅の様な形となる。全体に鉄分が固着している。実際に使用されたかどうかは不明である。焼成はあまく、軟質で淡橙灰色を呈す製品。

第1トレンチの地山直上層から石鏃（第19図）が1点出土した。風化が著しく、調整痕はほとんど観察することはできない。材質はサヌカイトだろうか。全体に白っぽく風化してしまっている。

## 第8節 UJ91-1区の調査

### 1. 位置（第15図）

今回の調査区は遺跡の北東端に位置し、調査区を境に海岸へ大きく落ち込んでいる。今回の調査で調査区の部分が段丘面の先端部分であることが確認された。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 7）

約2m×約2mのトレンチ1カ所を設定した。約40cmの現代の盛土及び現代の床土を除去すると、黄褐色の礫層が検出された。段丘礫層と考えられ、少なくともこの調査区までは段丘面上であることがわかる。礫層上で精査を行ったが遺構は検出されなかった。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

## 第7章 まとめ

今年度の、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、平成4年2月末現在で第1表に示したとおり78件を数える。この数値は前年度と比すと12件の増加、3年前と比べると約1.5倍にも増加していることになるものである。

昨年以來、経済成長の鈍化など景気に大きな変動がおり、一時は発掘届出の増加も落ち着く様子を見せたものの、空港関連事業を含め多様化・大規模化した開発行為が頻繁に行われている当市域においては、今年度の届出増加傾向をみると、これからも急増していく気配を感じずにはいられない。

こうした周囲の状況のもと、今年度も市内各遺跡群において合計24件の発掘調査を行いその内容究明に努めた。その内訳は、第2表に示したとおり男里遺跡13件、天神ノ森遺跡2件、幡代遺跡4件、兎田遺跡1件、新家遺跡1件、岡田遺跡2件、氏の松遺跡1件である。いずれの調査も個人住宅建設等に伴うものであり、調査面積をみても、開発に伴うものなどと比べればさほど大きなものではない。しかし、ここから得られた情報は決して少なくはなかった。

なお、本書では前年度調査未報告分の男里遺跡3件(90—8・11・12区)、幡代遺跡1件(90—3区)、岡田遺跡2件(90—2・3区)についても報告することができた。この成果も含め、以下に調査の成果を簡単にまとめておきたい。

男里遺跡では、今年度13件の調査がおこなわれた。特に男里現集落周辺に調査が集中し、一部遺跡東方の馬場、南方の幡代付近で調査がおこなわれた。各調査区ではそれぞれ貴重な情報を得ることができた。

91—1区では2面の遺構面が確認された。当調査区は地形分類上は自然堤防上に立地している。現時点では、この堤防上に形成された集落が、現在の男里集落の原点になるものと考えられている。今回の調査では時期を確認することができなかったものの、当地で少なくとも2面以上の生活面が確認されたことは、男里遺跡内の集落動向を知る上で貴重なデータとなった。

91—2区では顕著な遺構・遺物包含層はまったく確認できなかった。ここで、

過去の調査成果とあわせ考えてみよう。今回調査区では、まったく安定しない礫層が確認された。これと同様に、すぐ西側の調査例でも川の堆積層的な様相を確認している。一方、すぐ南では安定した地山面と、そこに刻まれた遺構が確認されたことがある。この南北両者の間には地形に変化があるものと考えて差し支えないだろう。穿ちすぎかもしれないが、両者の間には、旧道と水路が設けられている。どちらも古くから当地にあるもので、あるいはこれらが旧地形の変化を現在に表出しているものかもしれない。

91—4・90—12区は遺跡の北端付近に位置するが、ここでは弥生・古代～中世に至る遺物がわずかながら出土している。ローリングを受けているため、大きく移動されている可能性も残るが、当地周辺でもこれまで知られていたよりも古くから生活痕跡が確認される期待が高められたと言えよう

91—5区では、男里川旧河道に近接していることをにおわせる砂礫層が確認され、また91—6区周辺では一昨年度から地下水脈の存在などが指摘されていたが、今年度ははっきりとバックマーシュの一部を垣間みることができた。このように旧地形復原に必要な情報も順次蓄積が進んでいると言えよう。

91—9区では近世の所産と考えられる整地層が検出された。中世以降、荒れ地上に新たな居住空間を求めながら集落が拡大発達していく過程のものか、あるいは既に存在した集落が氾濫で滅し再び集落を構築した時のものか、どちらかは現在のところわからない。今後の調査例を期待したい。

91—12区は馬場集落の南方に位置している調査区である。ここ周辺ではこれまであまり調査の必要が発生しなかったため、内容はよく知られていなかった。しかし、今回の調査で遺構こそ存在しなかったが安定した面を確認でき、将来の遺構確認に期待をつなげた。

91—13区は遺跡の南端付近に位置しているが、ここでは弥生時代から古墳時代にかけて埋積した谷地形と、その後に営まれた集落の一部であるピット群が検出された。弥生土器も比較的まとまって出土しており、弥生集落がこれまで知られていたよりさらに南に広がっていることが推定される結果が得られた。また、ピットも柱穴を伴うもので掘立柱建物に伴うものであることは間違い無く、当地周辺にも下った時代の集落が存在する可能性が強まった。これらは、

南方の幡代遺跡のものとも関係するかもしれない。ともあれ、弥生時代に存在した谷地形が埋積し現在の状況に至る過程が、おぼろげにも判明したことは非常に有意義であった。

双子池の北西に位置する90—8区の調査では、時期は決定できなかったものの、複数の遺構面と溝等の遺構を確認することができた。想像をたくましくすれば、91—10区周辺の双子池西側の遺構密集地と当調査区までが、南北に長い帯状の遺構分布地域であるものかもしれない。これも今後の調査に期待したい。

一方、天神ノ森遺跡では、今年度2件の発掘調査がおこなわれた。これまでの調査でも遺構・遺物包含層は確認されていなかった。今年度の2件でも同様の結果となった。未だ遺物の分布範囲を確認している段階であることは先に述べたが、今後もこの作業にはげむ必要があると共に、現況の砂丘的な景観と砂層の形成過程を追求する必要があることをこの場で再確認しておきたい。

幡代遺跡に目を転じよう。ここでは今年度4件の発掘調査を行った。

91—1区および91—2区では氾濫原の堆積とおぼしき堆積層を確認できた。これは今後当地域の遺構分布を考察する上でも貴重なデータとなろう。

遺跡のほぼ中央に位置する91—3区および90—3区では、旧耕土層下より黒褐色土層が確認された。当遺跡内ではこれまで確認されたことはなく、調査がさほど行われていない遺跡の中央から東半へ向かって分布しているものとも考えられよう。この層は男里遺跡等でも認められるものに近似している。その性格はまだ不明であるが、今後の調査の「鍵層」となるかもしれず、分布範囲を明確にしていきたい。

兎田遺跡は樫井川の左岸沖積段丘面上に立地している遺跡だが、最近新規発見されたもので、遺跡の性格はおろか分布範囲も明確にできていない。今年度調査区は旧河道あるいは氾濫原の一部を確認できたもので、今後遺跡の北限を求めるための重要な情報を得ることができたと言えよう。

さて、ここ数年の調査の増加によってもっとも多くの知見を得ているのは、ここ岡田遺跡周辺ではなかろうか。特に岡田西・岡田東・新伝寺遺跡といった、洪積段丘低位面上に立地する遺跡発見があいつぎ、段丘面の開発開始時期が数年前に考えられていたよりも、大幅にさかのぼることが判明している。

この新規発見の発端となったともいえる岡田遺跡は氏の松遺跡同様、これらの遺跡群の中ではもっとも大阪湾に近い位置にある。ここでは今年度2件の発掘調査がおこなわれた。

91—1区現岡田集落区の中での初めての発掘調査となった。ここでは現在も寺院が存在しているが、調査区からは中近世の所産となる瓦群が遺構にともなって出土した。残念ながら遺構の性格等は断定できないものの、寺院関連遺構についてはもとより、周囲に存在するであろう集落の発見におおいなる期待を抱かせることとなった。

91—2、90—2・3区では、それぞれ遺構ないし良好な遺物包含層を確認できた。特に90—2区の調査は、当遺跡において初めての遺構発見となった。

これらの遺構群の内、ピットには柱穴を伴うものがあり、当地に掘立柱建物から構成される集落が存在することはまちがいない。また弥生・奈良、そして中世とはば広い時代におよぶ遺物が出土し、遺跡全体の年代観を書き換える結果となった。

氏の松遺跡では今年度1件の調査がおこなわれた。当遺跡における調査の嚆矢となった。ここでは遺構・遺物包含層こそ確認できなかったが、近接地まで広がることが確認されている集落の北限を推定するためのデータは得られた。

今後のこの段丘上面での調査例の増加を待ちたいとともに、岡田・岡田西・岡田東、および中小路など、市域東部に展開する遺跡群を積極的に比較検討することが当地周辺の歴史再構成へつながるものと信じている。

以上、今年度の遺跡群調査をまとめてきた。ここ数年の調査で情報量は圧倒的に増加してはいるが、いまだ十分ではないといえる。ただし、特定の区域に限ってみれば、ある程度の「空間」復原は可能となってきた。小規模調査の集積から、「面」へ「空間」へと歴史再構成は着実に進んでいる事を報告しておきたい。また、市域東部において顕著なように、新たな課題となるべき遺跡群の発見・調査が続き情報は蓄積されつつある。

このような遺跡の内容究明を行うためには、積極的な取り組みが必要であることはいうまでもない。我々の重い責務をここに再確認して筆をおきたい。



第5表 文化財一覧表

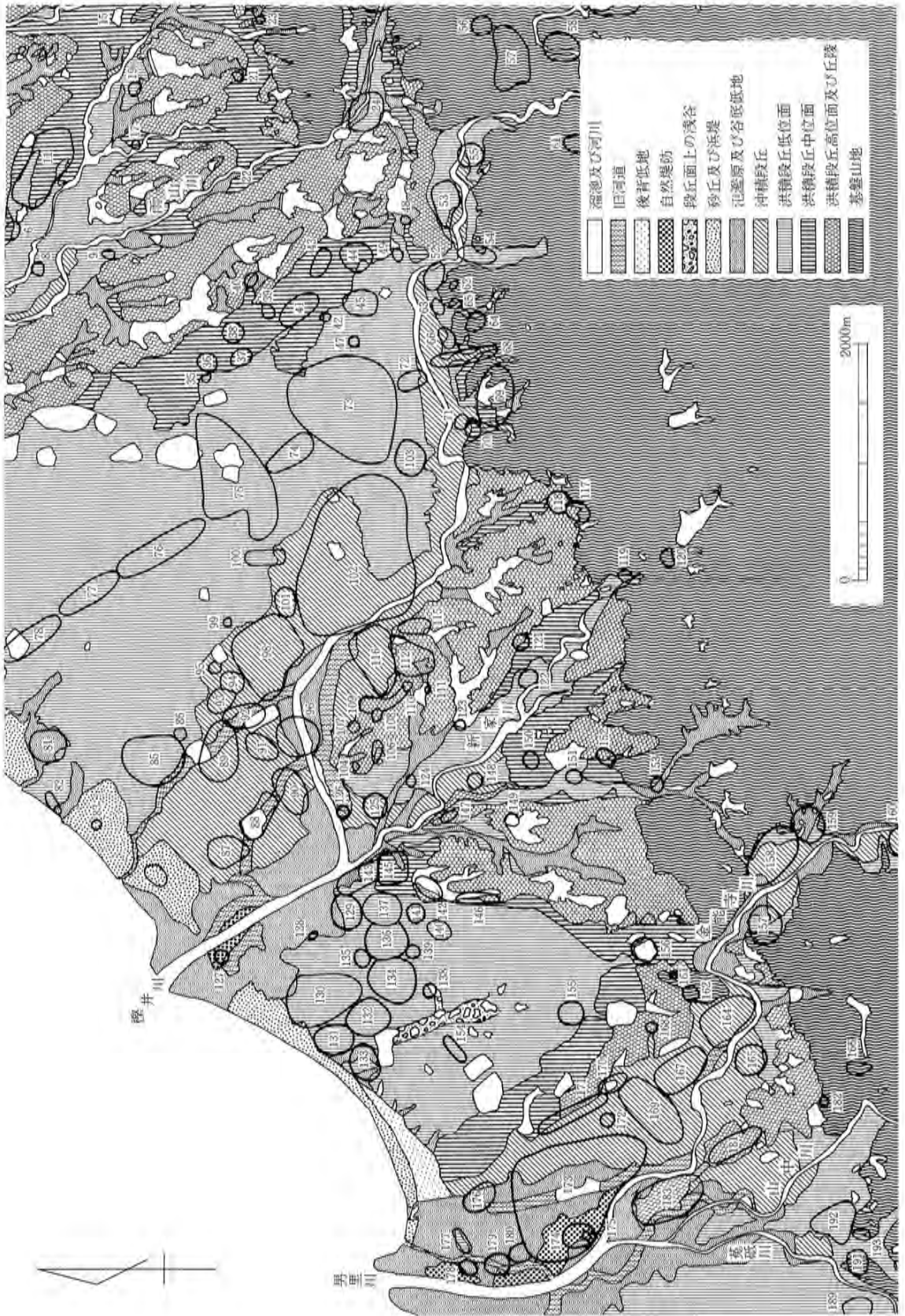
1	千石堀城跡	41	大坪遺跡	81	羽倉崎東遺跡	121	岩の前遺跡	161	林昌寺銅鐸出土地
2	白地谷遺跡	42	宮の前遺跡	82	羽倉崎遺跡	122	中の川遺跡	162	林昌寺跡
3	正法寺跡	43	市堂遺跡	83	嘉祥寺神社本殿	123	池尻遺跡	163	林昌寺瓦窯跡
4	大谷池遺跡	44	北之前遺跡	84	羽倉崎上町遺跡	124	新家遺跡	164	岡中遺跡
5	大久保B遺跡	45	野々宮遺跡	85	船岡山遺跡	125	下村遺跡	165	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	46	総福寺天満宮本殿	86	岡本廃寺	126	下村北遺跡	166	雨山南遺跡
7	降井家書院	47	垣外遺跡	87	田尻遺跡	127	川原遺跡	167	幡代南遺跡
8	降井家屋敷跡	48	屯田遺跡	88	夫婦池遺跡	128	岡田東遺跡	168	奥ノ池遺跡
9	大久保A遺跡	49	八王子遺跡	89	船岡山南遺跡	129	新伝寺遺跡	169	幡代遺跡
10	中家住宅	50	慈眼院金堂・多宝塔	90	樫井西遺跡	130	岡田遺跡	170	前田池遺跡
11	東門寺遺跡	51	日根神社遺跡	91	藤波遺跡	131	氏の松遺跡	171	長山遺跡
12	小垣内遺跡	52	西ノ上遺跡	92	道ノ池遺跡	132	岡田西遺跡	172	山ノ宮遺跡
13	金剛法寺跡	53	土丸遺跡	93	岡ノ崎遺跡	133	座頭池遺跡	173	男里遺跡
14	久保城跡	54	笹ノ山遺跡	94	中菰蒲遺跡	134	中小路西遺跡	174	光平寺跡
15	甲田小春家住宅	55	土丸南遺跡	95	岸ノ下遺跡	135	中小路北遺跡	175	光平寺石造五輪塔
16	五門北古墳	56	雨山城跡	96	櫻井城跡	136	中小路遺跡	176	戎畑遺跡
17	五門遺跡	57	土丸城跡	97	奥家住宅	137	北野遺跡	177	天神ノ森遺跡
18	五門古墳	58	下大木遺跡	98	諸目遺跡	138	坊主池遺跡	178	キレト遺跡
19	大浦中世墓地	59	大木遺跡	99	椽ノ塚遺跡	139	中小路南遺跡	179	高田遺跡
20	鳥羽殿城跡	60	中大木遺跡	100	禅興寺跡	140	仏性寺跡	180	男里北遺跡
21	来迎寺	61	稻倉池北方遺跡	101	ダイジョウウ寺跡	141	大苗代遺跡	181	高田山古墳群
22	山ノ下城跡	62	鏡塚古墳	102	三軒屋遺跡	142	海宮宮池遺跡	182	雨山遺跡
23	墓の谷遺跡	63	川原遺跡	103	上之郷遺跡	143	一丘神社遺跡	183	平野寺(長楽寺)跡
24	池ノ内遺跡	64	向井山遺跡	104	下村1号墳	144	鹿戸王子跡	184	皿田池古墳
25	成合寺遺跡	65	梨谷遺跡	105	下村2号墳	145	海会寺跡	185	神光寺(蓮池)遺跡
26	山出遺跡	66	母山遺跡	106	新家オドリ山遺跡	146	市場遺跡	186	三味谷遺跡
27	湊遺跡	67	母山近世墓地	107	新家オドリ山東遺跡	147	向井山遺跡	187	三升五合山遺跡
28	瓊波羅密寺跡	68	棚原遺跡	108	新家オドリ山南遺跡	148	上村遺跡	188	石田山遺跡
29	瓊波羅遺跡	69	向井池遺跡	109	新家古墳群	149	狐池遺跡	189	井関遺跡
30	佐野王子跡	70	意賀美神社本殿	110	フキアゲ山西遺跡	150	上野中道遺跡	190	岩崎山遺跡
31	上町東遺跡	71	向井代遺跡	111	引谷池窯跡	151	芋堀遺跡	191	寺田山遺跡
32	若宮遺跡	72	机場遺跡	112	フキアゲ山東遺跡	152	石ヶ原遺跡	192	自然田遺跡
33	上町遺跡	73	日根野遺跡	113	フキアゲ山1号墳	153	高倉山東遺跡	193	玉田山古墳群
34	市場東遺跡	74	郷之芝遺跡	114	フキアゲ山2号墳	154	本田池遺跡	194	玉田山遺跡
35	中嶋遺跡	75	植田池遺跡	115	兔田古墳群	155	上代石塚遺跡	195	玉田山須恵器窯跡
36	岡口遺跡	76	長滝遺跡	116	兔田遺跡	156	信之池遺跡		
37	小塚遺跡	77	安松遺跡	117	別所遺跡	157	滑瀬遺跡		
38	十二谷遺跡	78	末廣遺跡	118	別所北遺跡	158	六尾遺跡		
39	丁田遺跡	79	中間遺跡	119	高野遺跡	159	六尾南遺跡		
40	新池尻遺跡	80	松原遺跡	120	昭和池遺跡	160	金熊寺遺跡		

# 版 图

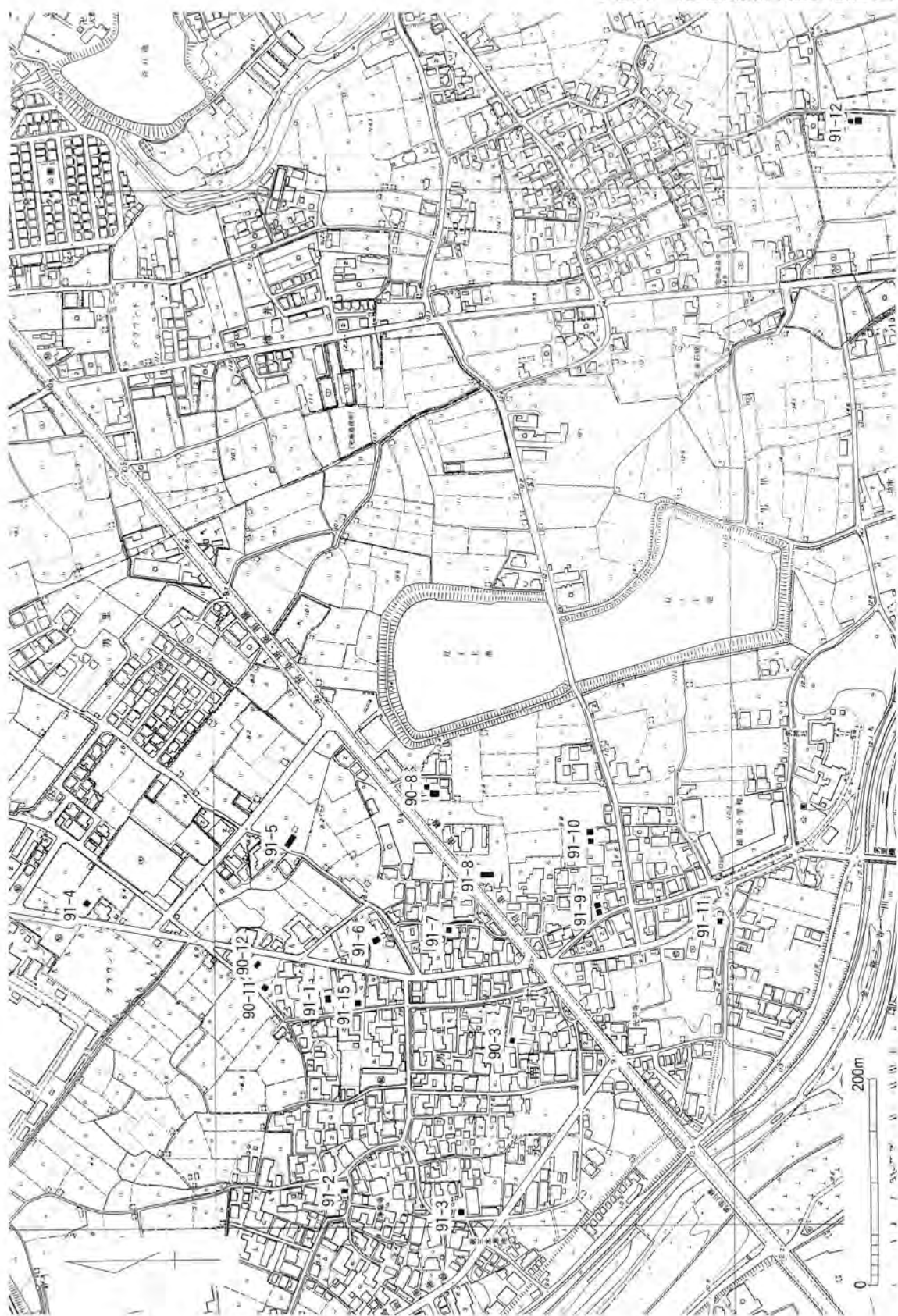
PL.1 泉南地域の文化財



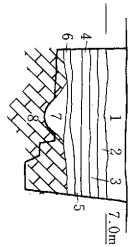
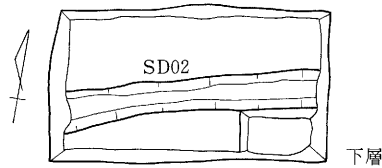
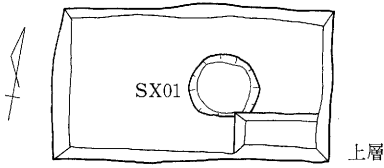
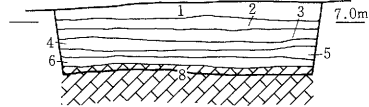
PL.2 泉南地域の地形分類



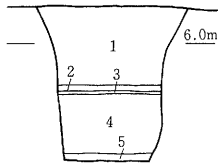
PL.3 男里遺跡調査区位置図



- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 盛土             | 5 黄色粘質シルト        |
| 2 灰褐色シルト         | 6 マンガン混じり暗灰褐色シルト |
| 3 黄灰色シルト         | 7 暗褐色シルト         |
| 4 マンガン混じり灰黄褐色シルト | 8 マンガン混じり暗褐色シルト  |

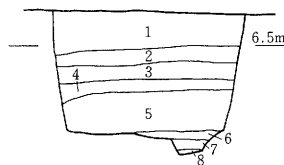


ON91-1区 平面図及び断面図



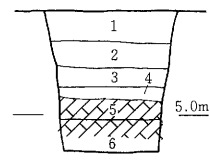
- |              |
|--------------|
| 1 盛土         |
| 2 暗灰色土       |
| 3 淡黄灰色土      |
| 4 黄色混じり暗茶灰色土 |
| 5 黄灰色砂       |

ON91-4区 北壁断面図



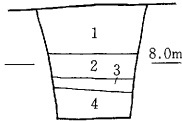
- |               |           |
|---------------|-----------|
| 1 盛土          | 5 暗灰褐色含礫土 |
| 2 暗灰色土(耕土)    | 6 暗灰褐色砂   |
| 3 礫混じり暗黄灰色砂質土 | 7 灰褐色粘土   |
| 4 暗黄色砂質土      | 8 暗黄灰色粘土  |

ON91-3区 東壁断面図



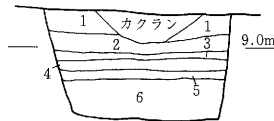
- |         |         |
|---------|---------|
| 1 盛土    | 4 暗灰色礫  |
| 2 暗黄灰色土 | 5 暗黄灰色砂 |
| 3 暗黄褐色土 | 6 暗灰褐色礫 |

ON91-2区 北壁断面図



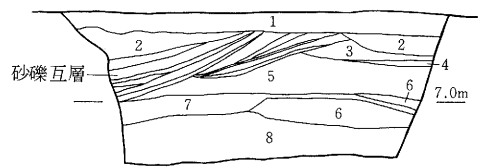
- |              |
|--------------|
| 1 盛土         |
| 2 石混じり暗灰色砂礫土 |
| 3 暗黄灰色粘土     |
| 4 暗青灰色シルト    |

ON91-7区 東壁断面図



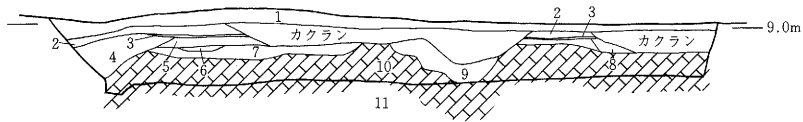
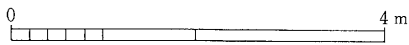
- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1 暗灰褐色土(旧耕土) | 4 黄灰色シルト      |
| 2 淡青灰色土      | 5 黄色混じり青灰色シルト |
| 3 淡黄青灰色土     | 6 青灰色シルト      |

ON91-6区 東壁断面図



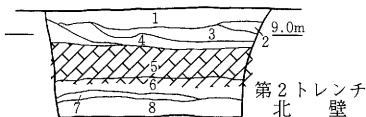
- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1 黄茶褐色土(床土) | 5 暗灰色粗砂     |
| 2 暗茶灰色含礫土   | 6 円礫含む暗灰色粗砂 |
| 3 暗茶灰色砂     | 7 灰色粘土混じり礫  |
| 4 暗灰色砂      | 8 暗黄色粘土混じり礫 |

ON91-5区 東壁断面図

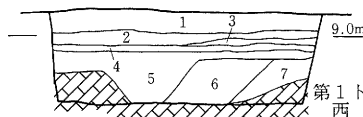


- |             |          |           |
|-------------|----------|-----------|
| 1 盛土        | 5 淡灰色砂質土 | 9 暗茶褐色土   |
| 2 暗灰色土(耕土)  | 6 茶褐色土   | 10 暗黄褐色粘土 |
| 3 黄橙色粘土(床土) | 7 灰色砂質土  | 11 黄褐色粘土  |
| 4 赤褐色土      | 8 灰色砂    |           |

ON91-8区 東壁断面図

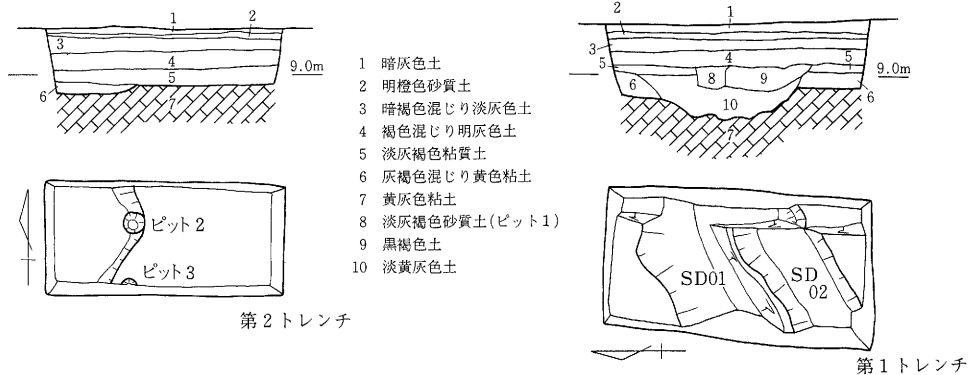
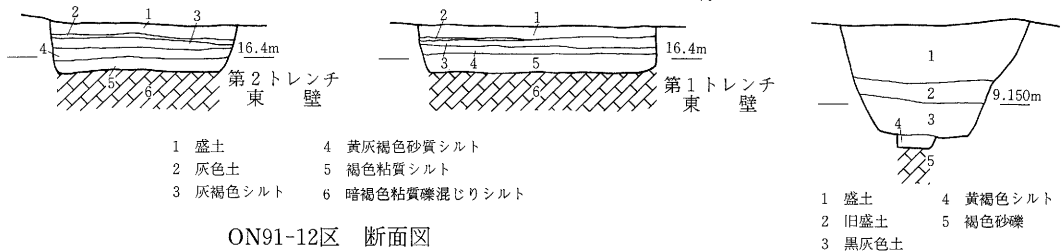
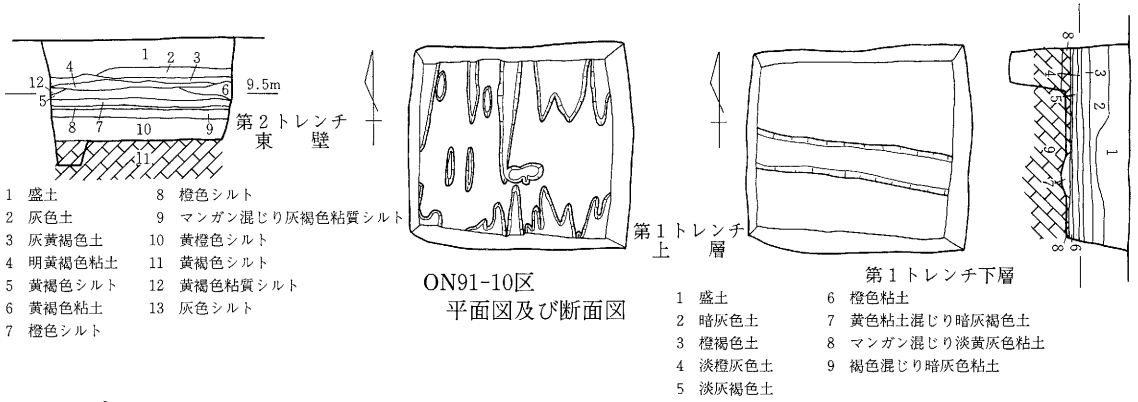


- |        |         |
|--------|---------|
| 1 盛土   | 5 暗褐色砂礫 |
| 2 褐色土  | 6 褐灰色微砂 |
| 3 灰褐色土 | 7 細砂    |
| 4 褐色土  | 8 褐色シルト |

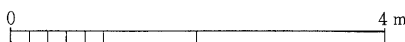
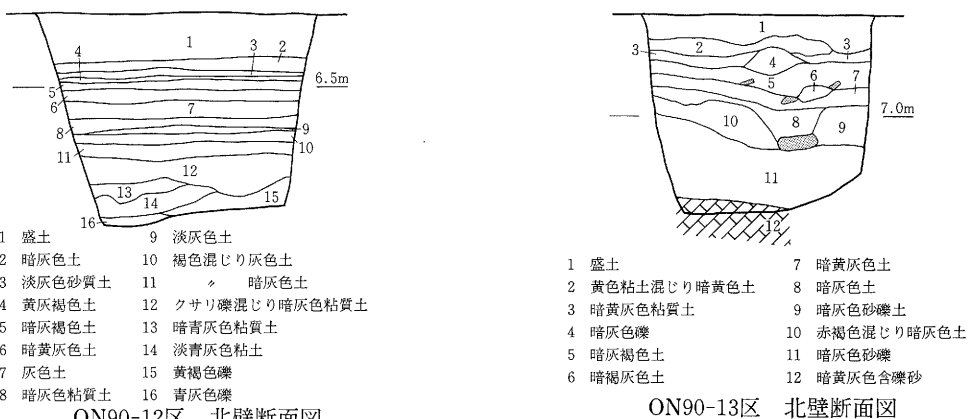


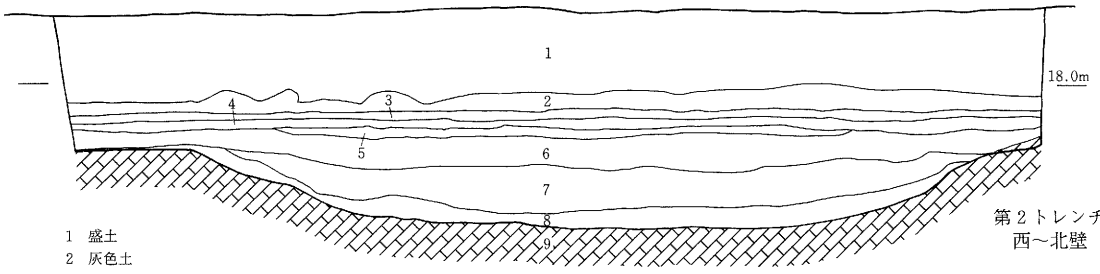
- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1 盛土        | 5 黒褐色土(整地層) |
| 2 黒褐色土(整地層) | 6 灰黒褐色土( )  |
| 3 褐色土( )    | 7 黄褐色土( )   |
| 4 灰褐色土( )   | 8 褐色砂礫      |

ON91-9区 断面図

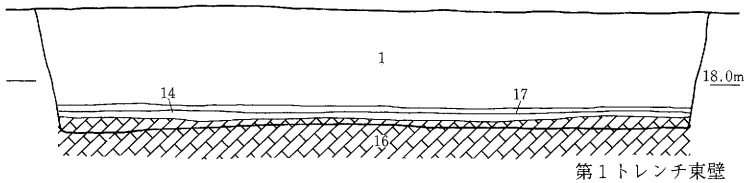
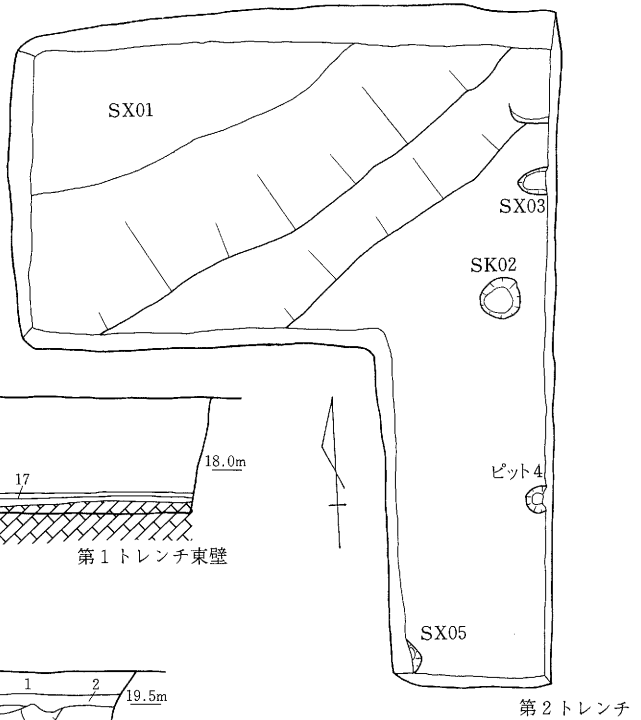
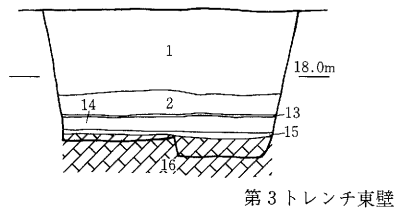
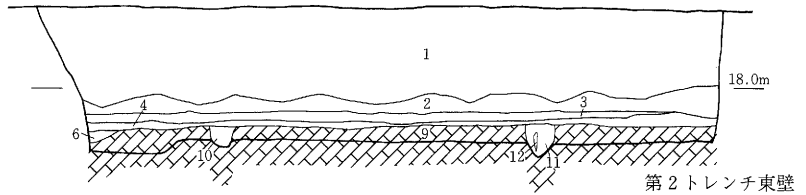


ON90-8区 平面図及び断面図

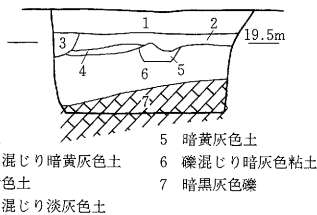
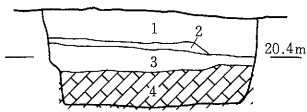




- 1 盛土
- 2 灰色土
- 3 浅黄色砂質シルト
- 4 明黄褐色シルト
- 5 におい黄褐色砂質シルト
- 6 暗褐色シルト
- 7 黒褐色シルト
- 8 褐色シルト
- 9 黄褐色シルト
- 10 褐色シルト (SX03)
- 11 におい黄褐色シルト(ピット4)
- 12 ♪ 褐色シルト ( ♪ )
- 13 赤褐色シルト
- 14 黄色シルト
- 15 暗灰褐色粘性シルト
- 16 におい黄褐色シルト
- 17 灰褐色シルト

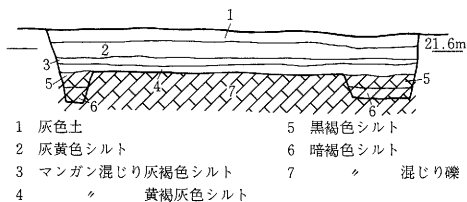


ON91-13区 平面及び断面図

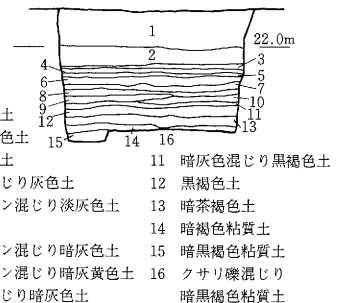


HT91-2区 北壁断面図

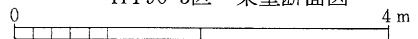
HT91-1区 東壁断面図



HT91-3区 東壁断面図

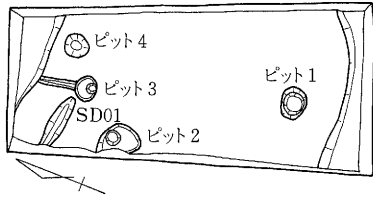
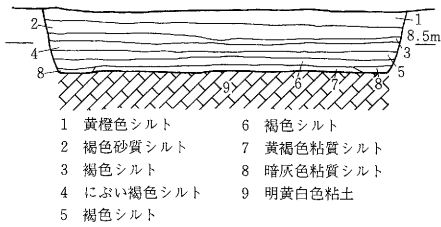


HT90-3区 東壁断面図

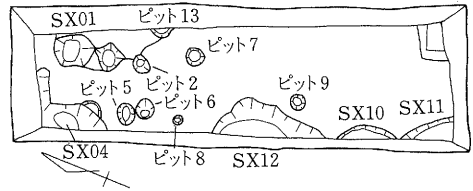
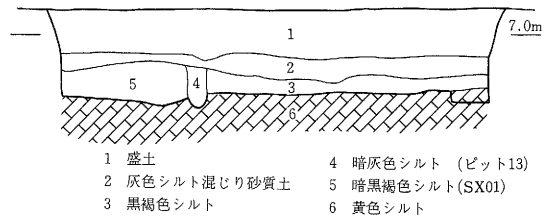
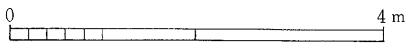




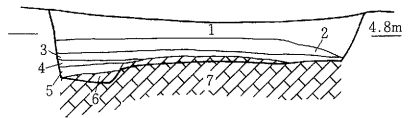
PL.7 岡田・氏の松・兎田・天神ノ森遺跡調査区



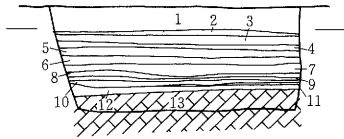
OKD91-2区 平面図及び断面図



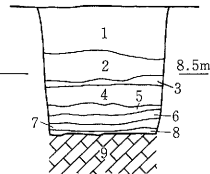
OKD91-1区 平面図及び断面図



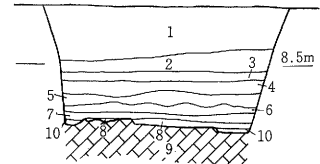
OKD91-3区 東壁断面図



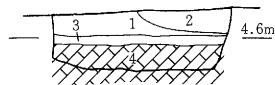
OKD90-3区 東壁断面図



第2トレンチ

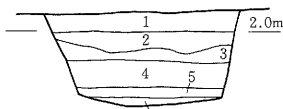


第1トレンチ

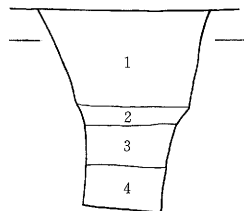


UJ91-1区 北壁断面図

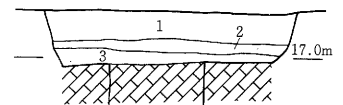
OKD90-2区 平面図及び断面図



TN91-2区 北壁断面図

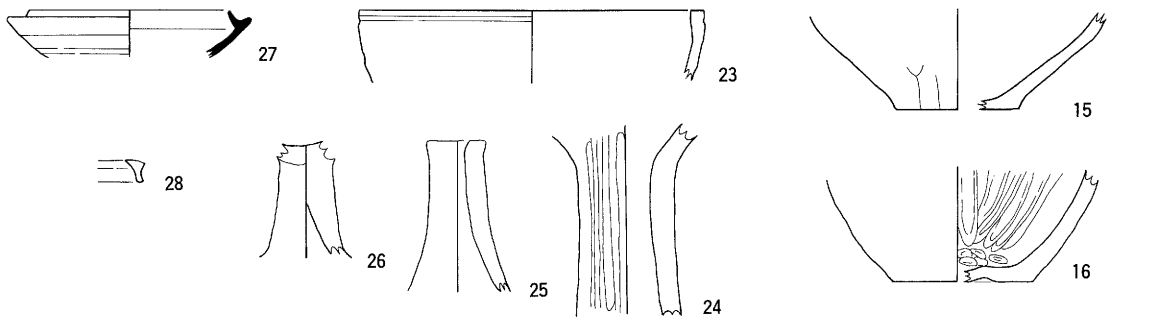
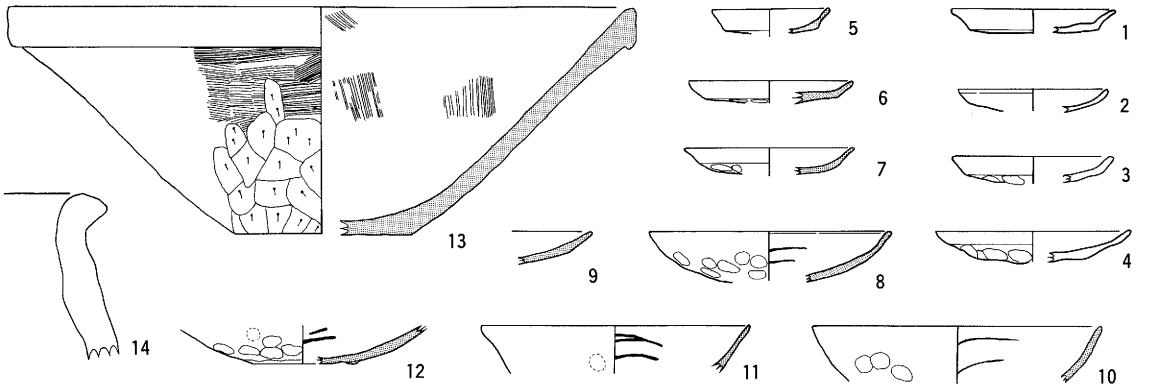


TN91-1区 南壁断面図

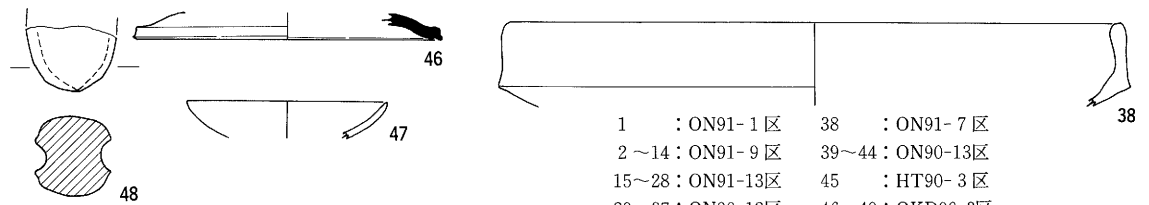
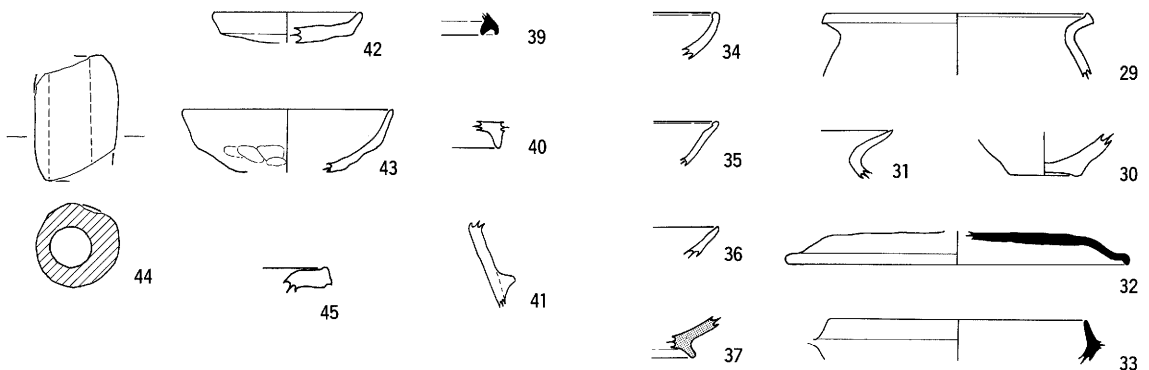
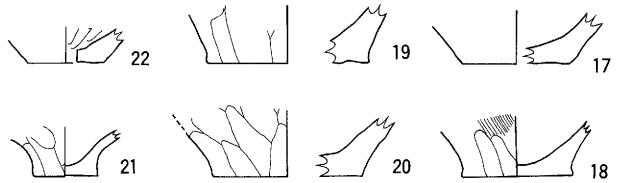
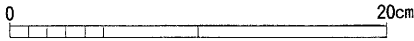


US91-1区 北壁断面図

PL. 8 各調査区出土の遺物



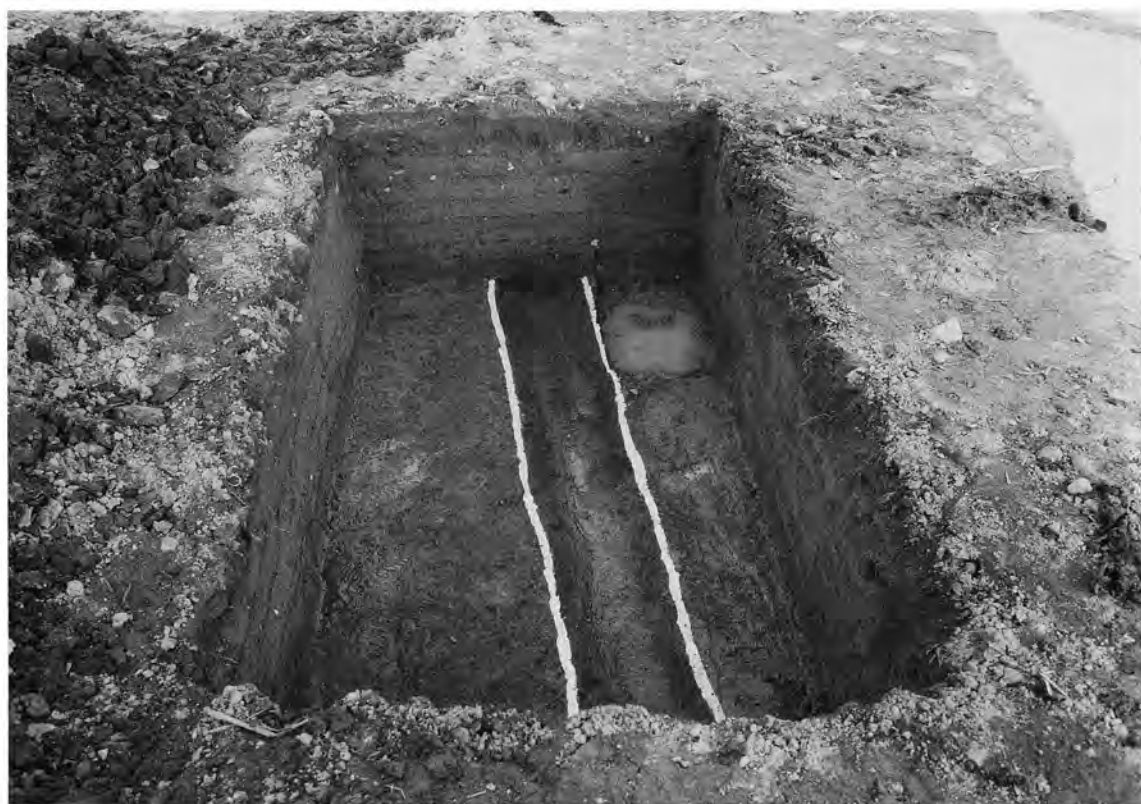
15~21 : ON91-13区 SX01最下層 出土  
 22~26 : " " 下層 出土  
 27 : " " 上層 出土  
 28 : " " ピット4 出土



1 : ON91-1区  
 2~14 : ON91-9区  
 15~28 : ON91-13区  
 29~37 : ON90-12区  
 38 : ON91-7区  
 39~44 : ON90-13区  
 45 : HT90-3区  
 46~40 : OKD90-3区



上層（西から）



下層（西から）



91-2区 (南から)



91-3区 (南から)



91-4区 (南から)



91-5区 (北から)



91-6区 (西から)



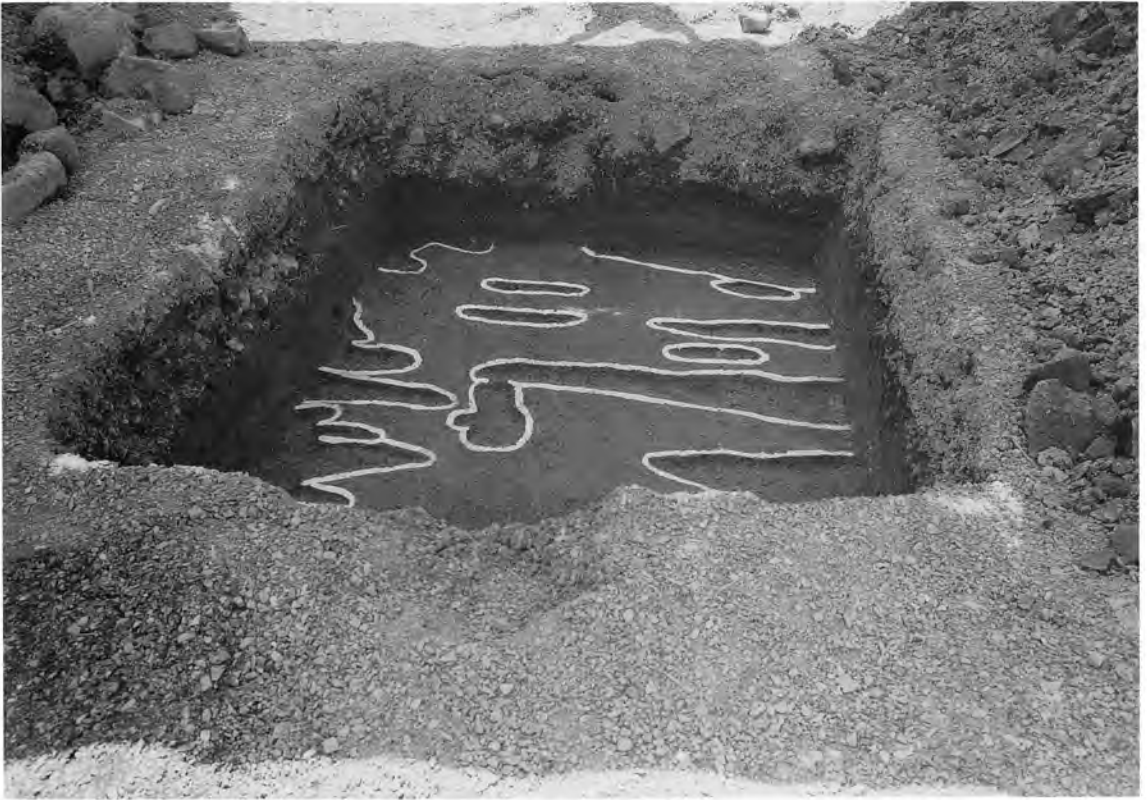
91-7区 (西から)



91-8区 (北から)



91-9区 (南から)



第1トレンチ上層（東から）

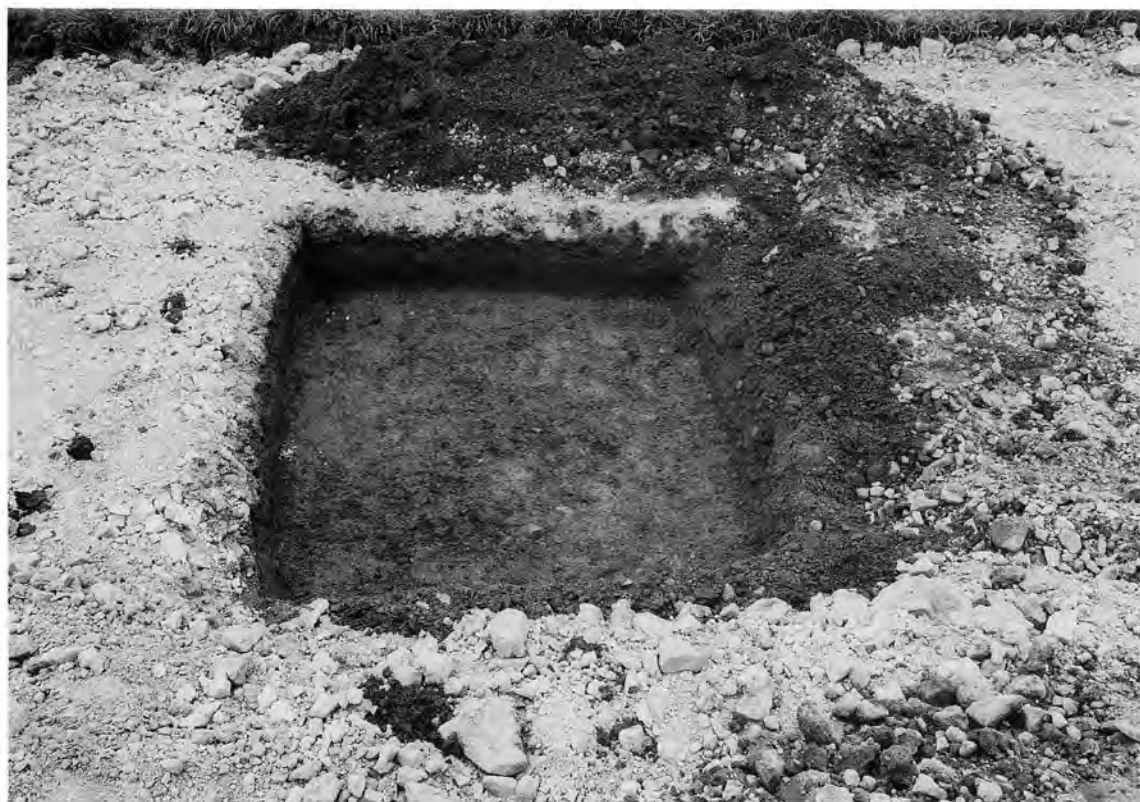


同上・下層（東から）





91-11区 (南から)



91-12区第1トレンチ (東から)



第2トレンチ (北から)



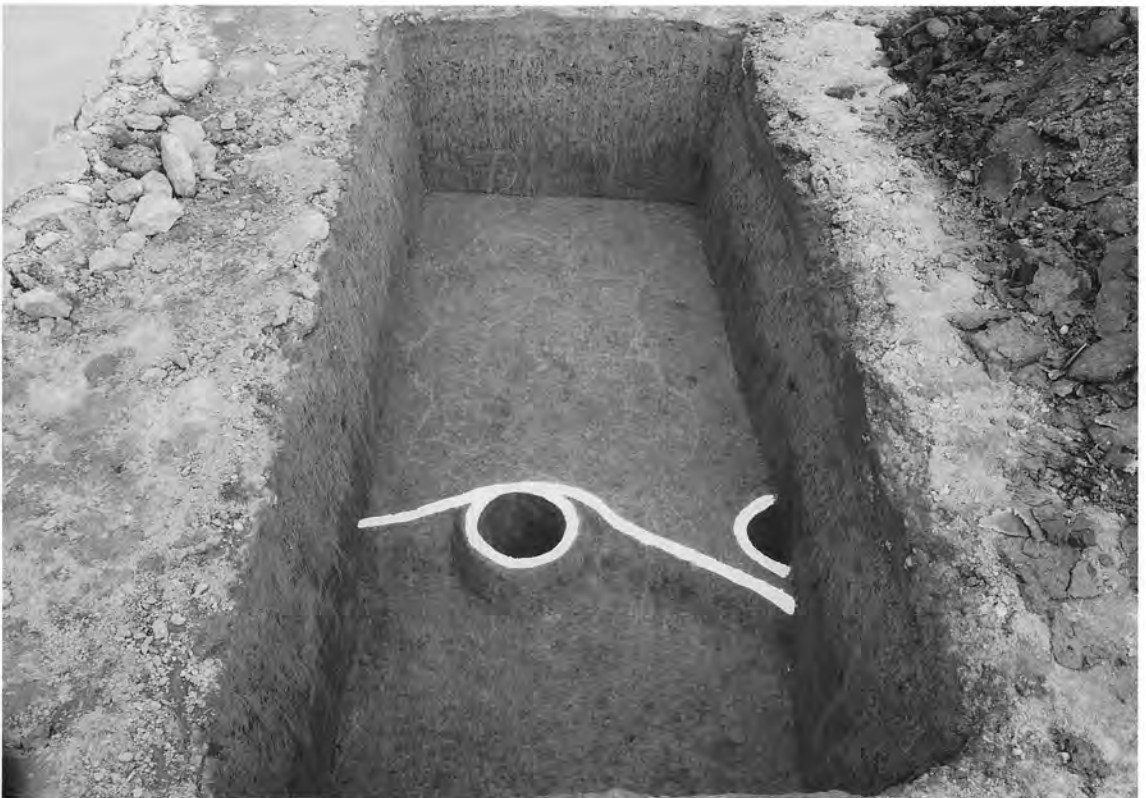
第3トレンチ (南から)



第1トレンチ (南から)



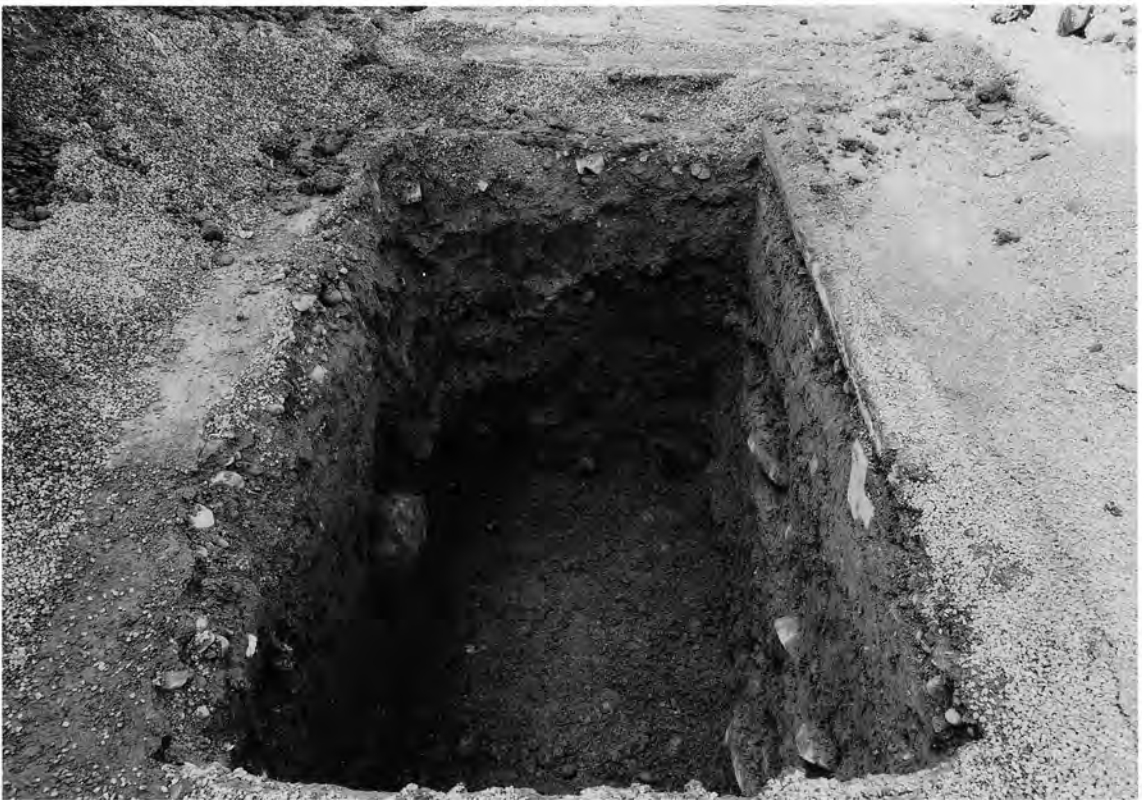
第1トレンチ (南から)



第2トレンチ (西から)



90-12区 (東から)



90-13区 (東から)



91-1区 (西から)



91-2区 (西から)



91-1区 (東から)



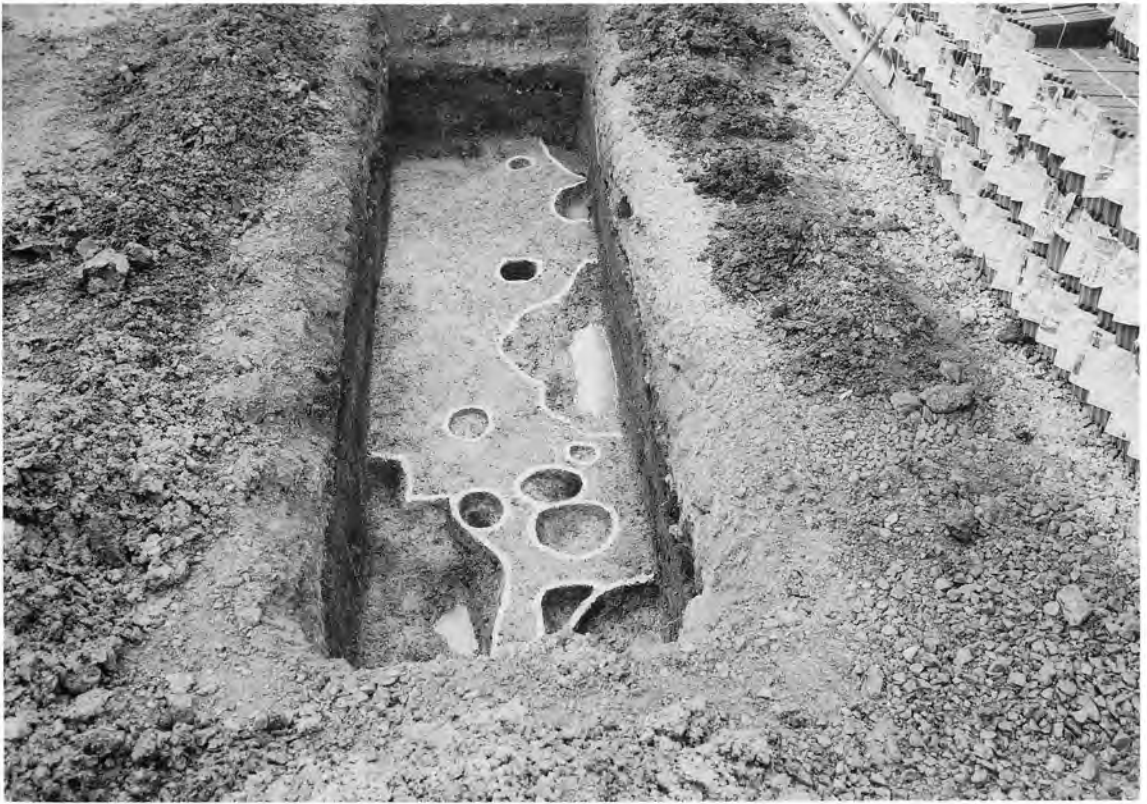
91-2区 (南から)



91-3区 (南から)



90-3区 (西から)



91-1区 (北から)



91-2区 (南から)

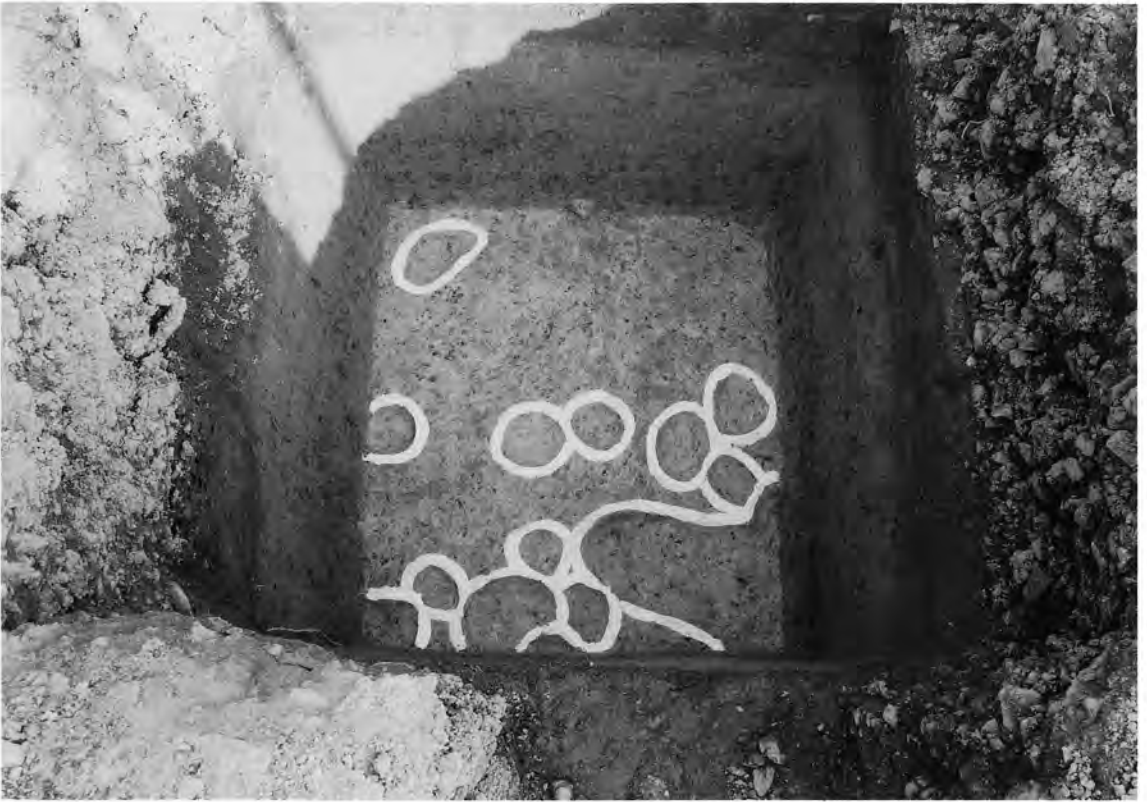




第1トレンチ上層（東から）



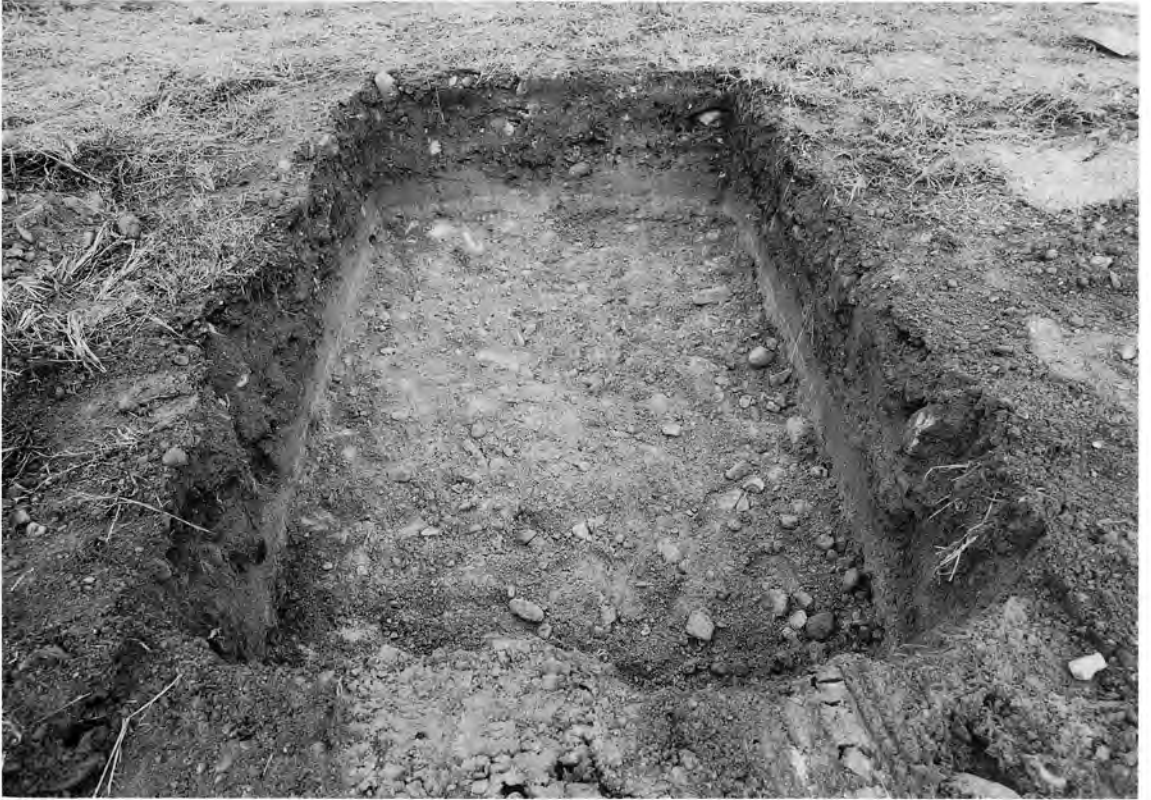
第1トレンチ下層（西から）



90-2区第2トレンチ (西から)



90-3区第1トレンチ (北から)



US91-1区 (南から)



UJ91-1区 (西から)

